え？転生？あ～はいはいそこのコンビニで売ってるあれね

asadukeB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
え？転生？あ～はいはいそこのコンビニで売ってるあれね

【Ｎコード】
Ｎ８８０３Ｗ

【作者名】
ａｓａｄｕｋｅＢ

【あらすじ】
働かない自称カミサマと名乗る老人のせいで生き残るはずだった電車事故で死んでしまった高校生が、これまた自称カミサマの趣味でチートなアルビノ体質の魔導師として『リリカルなのは』の世界で頑張るお話、オリ主チート原作ブレイクなどが苦手な方はご注意ください

プロローグ（前書き）

実は処女作なんだ！（満笑）
というわけで主人公ともども2～3度くらいの目で読んでください

ちなみに『主は』←ここ重要、Mではありません

晃「あれ？俺は？」

それではプロローグですが本編をどうぞ

晃「え？俺は？」

プロローグ

やあ、突然だが俺の話を聞いてくれ
実は今とてもすごい状況に遭遇しているんだが…

なぜか高校生にもなって知らない女性にまるで赤子をあやすような対応を受け
さらには、本物の赤子が両隣りに寝ているんだ

そして、ここからが重要なんだが…

「あばぁあぶばぁああ！（どうしてこうなった！）」

…ふう、落ち着け俺、
これはきっと夢だ！そうに違いない！
だってさっきまで通学のために電車に乗ってうとうとしていたからな！
きっとそのまま眠ってしまったんだろう！
そうでなければ高校男子が赤子になるわけが…

「あらあら、どうしたんでちゅか～？」

……

起きろぉぉぉおおおおお！高校生の俺ぇえええええ！

てかいきなり服をたくしあげるなぁああ！知らない女性(ひと)ぉぉおお！
ちょ！おま！この年で授乳とか！やめてええええ！そんな羞恥プレイ！
お れ は ノ ー マ ル だ ！

…さて、そろそろ状況を説明した方がいい気がしてきた
え？なんでかって？

…羞恥プレイから気を紛らわすにはこうでもしないと俺が持たない

と言ってもここまで俺の話を聞いてくれた方には大体の状況がつかめたと思う
なぜかわからんが俺は酷くリアルな悪夢を見ているらしい
しかも夢の中で自分が『夢を見ている』とわかるぐらいのリアルさだ
普通、個人差があると思うが夢を見ている間は、なぜか目の前で奇怪なことが起きても、さも当然のように思える
しかし一度起きて冷静に思い出してみると自分の目の前であんなことがあったのによくも平然としていたな、と思うのである

しかしこの悪夢はどうやらそう言う理論を超越した悪夢の様で、
もしこの悪夢が俺に何らかの恨みがあるのなら

…効果は絶大だ……

そんな俺への授乳(精神攻撃)も一段落し先ほどの女性（おそらくこの悪夢では俺の母親なのだろう）はまた入ってきた出入り口から出て行く
その間に俺はほとんど動かない首を動かし辺りを観察する
どうやらここは子供部屋の用で天井には子供用の回るオルゴールのようなものが吊ってある
他にもパン〇ースやぬいぐるみ、遊ぶだけで子供の脳を鍛える玩具など相当数のベビー用品が並んでいる

…ホントに夢だよね？このまま元の現実に帰れないとかないよね？
（汗）

はっ！そうだ！
確か何処かで読んだ本に『夢の世界で寝ると、現実の世界へ帰れる』って読んだ記憶がある…
なるほどそうとわかれば即実行！
…というか悪夢でもちゃんと赤子なのか何もしてないのに眠くなってきた、
まぁ、次に起きた時はちゃんと現実に戻れているだろう

俺が誰に話しかけていたかは俺にも謎だが、どうやら俺の悪夢はここまでの用だったようだ

この先を期待していたやつがいたなら、残念だったな！

ってもう限界、流石赤子寝るのがはｙ……

「スー、スー」

プロローグ（後書き）

前書きでも書いたけど

これ実は処女作なんだ！

ってなわけでご意見ご感想はたまた批判やご指摘がありましたら気軽に感想欄にかいてくだしあ

ちなみに批判に限って家の主人公がご対応しますのであしからず

晃「え？」

というわけでまだまだ若輩者ですがよろしくお願いします！

晃「エ―…」

第1話、「あれ？もしかしなくてもこれって悪夢じゃない？」（前書き）

これからは一日一話の感覚でいこうと思います

第1話、「あれ？もしかしなくてもこれって悪夢じゃない？」

やぁ、みんな久しぶりだね！
あれからこの悪夢に居続けて3年がたったんだ！

それでここまででわかったことを整理しようと思うんだ！

まず、俺の名前は『八月朔日（ほずみ）　晃（あきら）』真っ白な髪に赤い目で透き通るような白い肌の元気いっぱいなアルビノさ！
顔はまだ三歳だしこれからどうなるかわからんけど、なかなかいいほうだと思う
俺は平気なんだが、外に出ようとすると兄妹か親に止められる…、
今度グー〇ル先生に聞いてみよう
そんでもって俺には同い年の兄妹が二人いる
一人は大人しくて3歳のくせにすごく気がきく妹『春（はる）』
で、もう一人が脳みそ筋肉の元気な妹、3歳のくせに大人顔負けの運動神経の持ち主『夏（なつ）』

正直、夏はただの升（チート）だと思うのは俺だけだろうか？

まあ、兄妹の仲は物凄くいい、俺が夏をからかって怒っているところを春がなだめる
一見ただの兄弟げんかの様に見えるが3人とも楽しんでいる様だ

それから俺が住んでる街の名前が『海鳴市』って言うらしい
海が近く、潮の香りが心地いい、いい街だ

それに父親も母親も物凄く優しい、いまだに叱られたことはないが、たぶん物すごく怖いと思う

…いっつも笑ってるから特に

そしてこの悪夢についてもあることが分かった

結論から言うと、これは夢ですら無いらしい

しかも、

「もう、死んでるとか…ないわー」

ここに至るまでの説明をしよう

そう、あれは授乳(精神攻撃)事件から3年たったある日の夜…

〜　回?想　〜

一面真っ白な空間に居る俺の目の前には白髪でつるつるでいかにもそうな杖を持った『カミサマ』を名乗る老人(キチガイ)がいた

「ちょ！本物の神じゃよ！」

じゃあ老人(認知症患者)?

「それも違うわい！というか心を読んでる時点で驚かんのか…」

…え？

「え？」

…

「…ってふざけるためにおぬしの夢枕にたったわけではない！」

…じゃあ何しにきのさ？

「ここまで来ても喋らんのじゃな…、まあ良いわい」

ため息なんかはくと幸せにげますよ？

「誰のせいじゃ！誰の！ってまた話がそれたではないか」

で？結局何の様なんですか？自称カミサマ？

「もう何も言わんよ…、ここに来たのはおぬしの現状に関していろいろと報告せねばならんのじゃ」

…はぁ？

「面白いくらいわからんようじゃの…、普通3年もいれば疑問に思うじゃろうに…」

あの、なんのはなし？

「そうじゃのー…、簡潔に言うとおぬしは一度、死んでおるのじゃ…」

…あの…

「なんじゃ？」

滑ってますよ？

「ボケとらんわ！」

いやいやいや、死んだって言われてもこうしてピンピンしてますし…

「子供になったことに疑問を感じんのか…」

とか言う白髪でつるつるでいかにもそうな杖を持った『カミサマ』を名乗る老人（受けない芸人）がいた

振り出しにm「戻らんよ」…チッ

「とにかくおぬしは一度死んでいるのじゃが…」

…うん

「正直なことを言うとのぅ、一度死んだのはわしらの手違いなんじゃ…」

…

「…」

…で？

「いやいやいや、普通怒るか驚くじゃろう？」

いやだって正直あの世界には満足してるし元の世界には未練ないし…、唯一知りたいと言えばどんな死に方かってくらいだし…

「なにか物凄く拍子抜けなんじゃが、まあ良いおぬしはあの日電車事故に巻き込まれて、たった一人の生還者になるはずじゃったのじゃが…」

ふむ

「こちらの手違いで死なせていまったんじゃ…、すまぬのぅ」

はぁ…

「そこでの、お礼と言ってはなんじゃがおぬしの元の世界の”いんたーねっと”っとやらの”にじそうさく”によく出で来る”りりかるなのは”とやらの世界に生まれ変えたのじゃ」

…ごめん、しらんわ…

「そうかの？まぁもとの世界に返すにはもとの体が無かったのでの」

所でなんで神様がネットの二次創作とか知ってんの？

「なんでって、わしがすきじゃから」

…あ～、何となく俺がアルビノ体質で生まれた意味がわかった

「まあ、おぬしの場合太陽の光を受けてもなんともならんから安心するがよい」

…で？用件はこれでおわりか？

「そうじゃのぅ、最後に一つ…」

なに？

「朝起きればわかるのじゃが…、おぬしにわしから”ぷれぜんと”を用意しておいたのじゃ、」

へー…

「興味なさげじゃのぅ、まあよい朝起きたらパジャマのポケットを探してみなさい」

はいはい、わかったよ

「まぁこんな所じゃ、それではまたの、ほっほっほ」

～　回？想？終？了　～

そして朝起きての第一声が

「もう死んでるとか…ないわー」

所変わって先ほどの真っ白な空間

「あ…、あと三人転生者がいるって伝えわすれてしまったのう」

しかし考えこんで

「ま、いいかのぅ」

第1話、「あれ？もしかしなくてもこれって悪夢じゃない？」（後書き）

晃「結構重大なこと伝え忘れてない？」

いいんじゃない？俺が苦労するわけじゃないしw

晃「…ダメだこいつ、早くなんとかしないと…」

じゃあ次話もよろしくお願いします！

第2話、「むしろ夢であってほしかった…」（前書き）

本編の外国語はグー〇ル先生に教えていただきました

晃「何だ、実力じゃないのか」

……うるせいやい！

第2話、「むしろ夢であってほしかった…」

やぁ、みんな突然だけど今から言うことを想像してみてくれ！
白髪赤眼の三歳児が頭を抱えながら「死んでるとか…まじないわー…」と連呼している姿を、
そして時折子供とは思えないほどの重く深いため息を吐く姿を
まぁ俺のことなんだがな！
正直、前回自称カミサマにああいったけどやっぱりショックな物はショックなのだ
それでも

「あき兄ぃ、どうしたのー？」

「晃お兄ちゃん、顔色わるいよ？」

心配してくれたのは俺の同い年の妹達、春と夏だ

「あぁ、ちょっと悪夢を見ていたんだ…」

…いろんな意味で

「大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ夏、春」

いつまでも妹達に心配はかけられないので
妹達に大丈夫と言う

「じゃあ、着換えてリビングに行こうか」

俺はそう言って二人とは背中向きに着替える

（そう言えばあの自称カミサマ（キチガイ）がパジャマのポケットを探せとかいってたな…）

そう思い着換えながらパジャマのポケットに手を突っ込む

すると中から見覚えの無いアクセサリーが出てきた

（なんだこれ？ブレスレットに…本？）

出てきたのは銀でできた細めのブレスレット、それに小さな本の飾りが付いた物だった

（まじでなんだこれ？）

「あき兄ぃ、どうしたの？」

背後から夏に声をかけられる

「…いや、何でもないよ」

「…？」

そう言いながら俺は着換えを再開する

「…いまだになれないな…」

俺がきているのは青色の俗に言う園児服だ、胸にはチューリップをかたどった名札がつけられている
名札には「ほずみ　あきらくん」と書かれている

（まるで拷問だな…、まあ3歳って言っても中身は高校生の最高学年だし）

4月から入園し今は6月下旬、約3ヵ月もの間この格好で3歳児と戯れなければならないと考えるなら
その精神的苦痛を理解していただけると思う

（二人といるとあんまり気にならないんだけどな、…なんでだろう？）

そう思い二人がいるであろう後ろを振り返る

春はもう着換え終わったのか、ぎこちなくも丁寧に背中まであるストレートの黒髪にブラシをあてている
だが

「ん～、んー！」

…なんか園児服を仮面にして床でもがいてる生き物がいる

「夏、何やってんの？」

俺が話しかけると園児服の生き物は声がした方向に顔？を向ける

「あき兄ぃ！てつだって～！」

ため息を吐きつつも園児服の出口まで夏の頭を誘導してやる
しばらくして「すぽん」というＳＥの幻聴とともに夏の頭が園児服から出てくる

「お～、ありがとあき兄ぃ！」

「あぁ、どういたしまして」

ちなみに夏はタンクトップを下にきているので裸は見えなかった
まぁ、「見たい！」なんて言う奴はいないと思うが、
居ないと思うがな！

「別にみたいなどとは言っとらんぞ！」

…なんか幻聴が聞こえた気がしたが気にしない

そんなことを考えてい間に着替え終わったのか夏と春が俺の方へ歩いてくる

「あき兄ぃ！きがえたよ！」

「私も着替え終わりました」

「そか、じゃあリビングに行こう」

そう言ってリビングへ向かう
リビングには新聞を読みながら朝のコーヒーブレイクに浸る父と
テーブルの上に朝食を並べる母の姿があった

「あら、みんなおはよう」

「お母さん！おはよう！」

「おはようございます、お母さん」

「母さん、おはよう」

三者三様の朝の挨拶をして席に座る

「お？三人とも今日も自分で着換えたのか、えらいぞ～」

「ありがとうございます、お父さん」

「あ、でも夏はあき兄ぃに手伝ってもらった！」

「そうか、流石お兄ちゃんだな！晃も偉いぞ～」

正直褒めてもらうのは悪い気はしない、だがなんか馬鹿にされている様に感じるのは仕方ないことなのだろう

なんたって中身は高校生でも、外見は（容姿や体質は置いといて）普通の3歳児だもんな…

「うん、ありがとう父さん」

そうこうしてる間に朝食を食べて身支度を済ませる

洗面台と格闘しなければならないこの身長以外は特に問題もなく終わる

「行ってらっしゃい、三人とも」

「いってきます、お母さん」

「いってきます」

「いってきまーす！」

母に送り出され、春、俺、夏の順に挨拶を交わし
通園バスに乗り込む

俺たちが通う幼稚園は年長の子が年少の子の面倒を（先生と一緒に）
見ると言うシステムがあるのだが…

「まぁ、この外見じゃあな…」

そう俺はアルビノ体質で髪が白、目が赤という子供から見れば怖い
だけの対象だ
なので現在俺は運動場の隅の木陰に居る

「まぁ、あいつらがいじめられてないだけましか…」

そう言う俺の目線の先には元気に駆け回る夏と
数人の女の子に囲まれながら花冠を作る春の姿、
二人ともとても楽しそうである

（……寝るか……）

そう思って俺は瞳を閉じて眠りにつく
幸いこの木陰はなかなか寝心地が良く俺のお気に入りの場所だ

しばらくたって急に声をかけられた

「おい！」

（……？）

もそもそと目をこすりながら声がした方を見ると
金髪で蒼い目ツンツンの髪型の男の子が一人

（……外国人？）

そう思ってもおかしくない容姿の男の子に話しかけられて少し驚きつつも
「こんな奴いたっけ？」と内心疑問に思う

「おい！おまえ！」

とりあえず英語で話してみる

「Ｗｈａｔ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｗａｎｔ　ｆｒｏｍ　ｍｅ？（私になにか用？）」

「へ？……」

なぜか「何言ってんだ？こいつ」みたいな顔をされた…

「えッと…、ハロー？」

（こいつ、アメリカ人じゃないのか？）

ならばと語源を変えてみる

「Ｆａｉｔｅｓ　ｑｕｅｌｑｕｅ　ｃｈｏｓｅ　ｐｏｕｒ　ｍｏｉ？（俺になにか用か？）」

「？？？」

先ほどと同じ反応、どうやらフランス人でもないらしい

（そう言えばさっき日本語喋っていたような？）

「さっきから意味わかんねぇことばっか言いやがって！」

どうやら日本語でおｋだったらしい

「てめぇ、なにがいいｔ「なにか用か？」…喋れるのかよ！」

相手が喋り終わらないうちにさきほどの言葉を日本語に変換して話す
すると相手はいきなり澄ました顔で

「いいかい？この幼稚園ではあまり目立たないほうがいい、もしまだ目立つようならこのぼくが許さないから覚悟するように…」

（こいつ、何言ってんだ？）

えーっと、アレだアレ…、そうナルシストだ！
まさに口元に軽く手を当て、もう片方を反対側の腰に回す
園児がこんなことするといろいろなものが際立つな…、悪い意味でだけど

「あ、れいじくんこんな所に居たんだね！」

れいじと呼ばれたナルシス変t…もとい男の子の後ろから女の子ばかりが

ぞろぞろとやってきた

それに気付いた男の子(ナルシス変態くん)はここぞとばかりに俺に自慢げな顔を向けてくる

まるで勝ち誇ったように

（いや、園児にモテてもな―…）

心の中で率直な感想を述べる俺、実際園児にモテてもうれしくもなんともない

そのあともこれ見よがしに女の子（ただし三歳児）の前でかっこをつける男の子(ナルシス変態くん)

その男の子(ナルシス変態くん)の一挙一同に女の子たちが

キャーキャーと騒がしくしていたので教室に帰ることにした

…なんか帰る時後ろから「見てみな、僕の視線に怖くなって逃げて行くよ」って聞こえた用な気がしたけどきにしない

帰る途中、孤立した夏と春がいた

「どうしたんだ？」

そう聞くと春と遊んでいた子たちは、あの男の子(ナルシス変態くん)の所に集まって

夏と一緒に遊んでいた（男の子とサッカーをしていたそうだ）子た

ちはいきなり不機嫌になって教室のほうへ戻って行ったらしい

（ほんと、迷惑極まりないな…）

そう思いながら一度、男の子（ナルシス変態迷惑野郎）の方を見てそのまま教室に戻った

教室は男の子と数人の大人しそうな女の子達しかいなかった

…しかもなんか空気が重い

「（あの野郎……）」

「（くそッ……くそッ！）」

っと誰かがささやく声が教室じゅうから聞こえる

春も夏もなんか怯えてる

正直、俺も怖い

そんな幼稚園も昼までで終わり通園バスで帰路につく

俺たちは三人仲良く一番後ろの長椅子に座っている

「今日はなんかすごかったね…」

口を開いたのは夏だ

「うん、みんなちょっと変だった…」

その次に春

「まぁ、たまにはこういう日もあるさ…」

そして最後に俺だ、みんなあのあとから元気が無い

そのあとは無言のまま家に着いたのだった

第2話、「むしろ夢であってほしかった…」（後書き）

はい、カンがいい人はもうわかったと思いますが
あの金髪の男の子は転生者です！

晃「あれがそうなのか？」

はいそうです、ちなみにこれからも主人公に絡んでいくので
結構な頻度で出てくるかも

晃「えー…、まじで？」

…割とまじで
というわけで次話もよろしくお願いします！

第3話、「これがフラグってやつですか……」（前書き）

なんか一話重ねるごとに文字数が増えるんだけど
あんで？

晃「しらんがな…」

第3話、「これがフラグってやつですか……」

あのあと家に着いた俺達三人は帰ってくるなり母親に
「どうしたの！？みんな！」って言われてかなり心配された
…相当顔色がわるかった様だ
その後母親と俺達で昼ごはんを食べて自由時間となった
俺の家の近くには結構大きな公園があって昼間はそこで遊ぶのだ
と言っても俺は幼稚園に居た時と同じく木陰で昼寝するだけなんだ
がな！
と思っていた時期が俺にもありました

「どうしてこうなった…」

「あき兄ぃ！いっくよー！」

俺はいま夏と一緒にキャッチボールをしようとしている

なんでかと言うと第1話で夏の運動神経はチートだと書いたと思うが
…それについていけるのが、今のところ俺だけなのだ
（兄妹がチートだと思ったら、自分も負けず劣らずチートだった件）
と、思っていると夏が振りかぶる姿が見えた
瞬間、「豪っ！」とホントに子供用のボールが出す音かと思うような音が聞こえた
ボールは一直線に俺のグローブに収まる
…「ドパァン」て俺のグローブから聞こえたきがしたが気にしない
（…加減しろよ……）
そう思いながら緩やかな曲線を描く様に夏に投げ返す
その後しばらくの間「豪ッ！」と言う音と「ドパァン！」と言う音が公園じゅうに響いていた
しばらく夏に振り回された後今度は春がこちらに歩いてくる

「晃お兄ちゃん、向こうで一緒に遊びませんか？」
「いいよ、ちょうど夏も他の子と遊ぶみたいだし」
そい言って夏の方に視線を向ける
そこには元気に鬼ごっこをしている夏の姿があった
俺たちは少し移動して公園のベンチまで行く
「で、何して遊ぶんだ？」
「えっと、恋人ごっこなんてどうでしょう？」
春がもじもじしながら答える
…なんか可愛い
「わかった」
そう言って春にベンチに座るように進められる
春は少し離れたところに居る
そして手を振りながらこちらに小走りで走ってくる
「明人さーん！」
どうやらもう始まっているようだ
「待ちました？」
「いや、俺もさっき来たばかりだよ」

とりあえず適当に合わせる

「よかった、また遅刻したかと思いました」

そう言って春は胸をなでおろすしぐさをする

（結構、凝ってるな）

そう心の中で関心しつつ会話を進める

「もし、私がすっごく遅刻したらおこります？」

上目使いでもじもじしながら聞いてくる

…ホントに3歳児だよね？

「いや、怒らないよ」

「…ホント？」

「もちろん」

「ありがとう！明人さん！」

そう言いながら他合いもない会話を続ける

しばらく他人が見たらピンクのオーラを幻視できる様な空間を作っていたら

ベンチの後ろの茂みから一匹の子猫が俺たちの目の前で腰を下ろす

「にゃー」

「よ、芳樹さん！？」

……芳樹って誰？

「にゃー」

「ち、違うの！明人さん！これには深い事情があって…」

そう言いながら春はベンチから飛び立って俺と子猫の間に立つ

「この人は昔中が良かっただけの人なの！」

「にゃー」

「ち、違うわ！あなたとは別にそんなかんけいじゃあ…」

……いまいち状況が読めないんだけど

「明人さん、違うの！この人は別に元彼とかじゃなくて…」

「にゃー？」

「う、ウソじゃないわ！あなたとはただの友達だったのよ！」

……俺、なんかハブられてる？

「…ごめんなさい、明人さん、あの人は確かに昔付き合っていただけなの、今はもう何でもないの！」

なんか春が目尻に涙を浮かべてる

「にゃー…」

「違うわ！あのときはあなたが好きだったけど今は違うの！」

「にゃー」

「ごめんなさい、もうあの時には戻れないの…」

「にゃー…」

まるで空気を読んだかのように子猫は来た道を帰っていく

…まさか仕込んでたとかないよね？

「ごめんなさい、明人さんこんなアバズレ嫌いになりましたよね…」

うつむいて涙声になりながら春が言う

「でも！私は明人さんのことが大好きなの！」

そう言って俺にもたれる形で服をつかんで顔を近づける

春の顔には涙が伝った跡があった

「…これからも、一緒に居てくれますか？」

「う、うん…」

「ホントに！？うれしい！」

「ぽとっ」

（ぽとっ？）

春が俺に抱きついていたところに、何かが地面に落ちる音が聞こえた
俺が音のした方を見ると、さっきまでボールとグローブを持っていたのか
手をおなかの所で止めて硬直している夏の姿があった

「……うそ…」

「っ！マイちゃん！これは違うの！」

……無限ループって怖くね？

あのあと春の友達に止めてもらわなければ今もハ〇ウッドでも通じる『恋人ごっこ』が展開されていただろう
…考えるのはよそう……

（まさか春にあんな一面があるとは…、以後注意だな）

そう思いを心に刻みながら二人の元を離れる
夏のキャッチボール（豪速キャッチ）で体力、春の恋人ごっこ（昼ドラ）で精神的に疲れた俺は

とりあえず先ほどの木陰に移動する

（…？）

木陰に移動する途中、一人でうずくまっている同年代くらいの少女を見つけた

（怪我でもしたのか？）

そう思い、少女に近づく

近づくにつれてうずくまった少女から「ヒック…ヒック…」とすすり泣く声が聞こえてくる

「どうしたんだ？」

「ッ！」

俺が声をかけると少女はびっくりしたように俺を見上げる

「泣いてたけど、怪我でもしたのか？」

「……」

少女は警戒しているのか一向に喋らない

「…俺は、八月朔日（ほずみ）　晃（あきら）だ」

「…えっと、高町なのは」

ほとんど無言で互いに自己紹介を交わす

「で、どうしたんだ？」

「うんん、何でもない」

そう言ってなのはと名乗った少女は立ち上がる

「ウソつけよ、泣いてたろ？」

「…泣いてない」

どうやら他人に弱い部分を見せたくないようだ
まぁ初対面（しかも白髪赤眼のアルビノ体質）の人間に警戒しているのが大半だろうが…

（…めんどくせぇガキだな…）

「別に誰にもいわねぇから話してみろよ」

「…ホント？」

「ウソはいわねぇよ」

そう言うと少女は泣いていた理由を喋りだした
内容は父が怪我をして入院しており家族が少女の面倒を見れないというものだった

「…それでさびしくて泣いていたのか」

「…そうなの…」

（なんか俺いま、物凄くめんどくさいことに首突っ込もうとしてないか？）

そう思いつつ首を突っ込んで痛い目見るのがおれだけどな！

「友達もいなくて、お家に帰っても一人ぼっちで、誰も遊んでくれなくてぇ…」

少女の言葉の最後の方は涙声になりながら語る

「ぐずっ」っと鼻水を吸う音とともにきれいな栗色の短いツインテールが揺れる

「…仕方ないな、一緒に遊んでやるよ！」

「え？」

体力的にも精神的にも限界近いが同年代の子供と遊ぶくらいはできる

対して少女、なのははまるで信じられないという顔で見返してくる

「なんだ？俺じゃいやか？」

「うんん、違うの、びっくりしただけなの！」

そう言うと途端にうれしそうに笑う

それから夕方までなのはと遊んだ

内容は他合いのないものだ

かくれんぼや鬼ごっこ、

二人でやってるのですぐに飽きるが、それでも
夕方まで時間を忘れて遊んだ
それこそそろそろ帰らなければという時間まで
「高町、俺もうそろそろ帰らないと…」
「えッ…」
さっきまで楽しそうにしていたが、俺が『帰る』と言った途端表情が曇る
「…心配すんな、明日も一緒に遊んでやるから」
「ホント？」
「あぁ」
「ぜったいだよ？」
「あぁ、絶対だ、だからお前も早く家に帰りな、もしかしたら家の人が心配してるかもよ？」
「…うん」
なのはは少しうつむいて悲しそうな顔をしたがすぐに笑って
「じゃあまた明日！あきらくん！」
「あぁ、また明日な、高町」

そいってなのはに手を振りながら反対方向に歩きだす

ほどなく家に着いた俺は

「あき兄ぃ！どこに行ってたの？」

「いや、ちょっとね…」

「どうしたんですか？晃お兄ちゃん、なんだかとっても疲れている様に見えますよ？」

「うん、大丈夫？あき兄ぃ？」

（お前等が言うなよ）

「気のせいだよ…」

そう言って着替えて晩御飯を食べた後、風呂に入ってベットに入った

（そう言えば自称カミサマからもらったあれって何なんだろう…）

そう思いつつ俺は意識を手放した

第3話、「これがフラグってやつですか……」（後書き）

晃「なぁ」

ん？なんだい？

晃「なんで俺なのはのこと『高町』呼んでんの？」

ん～、初対面で名前って言うのは、あの3人だけの特権みたいな感じだから？

それに晃君中身高校生だし

晃「…で本意は？」

何となくに決まっt…はっ！

晃「やっぱり何にも考えずに書いてたのか…」

ごめんなさい！

晃「こんなダメな作者ですが、よろしくお願いします」

…お願いします

第４話、「俺が魔法で状況がマッハ」（前書き）

誰かおらに英語力をわけてくれ！

晃「…英会話勉強しろ」

第４話、「俺が魔法で状況がマッハ」

あれから数日がたった今日この頃（なのはと遭遇）
相変わらず幼稚園に行けば男の子が絡んでくる（ナルシス変態迷惑野郎）

ある時は教室で、そしてある時は運動場で

…流石にトイレまでついてきたときは若干引いた

それからなのはともあれから幼稚園が終わったあとに、いつもの公園で一緒に遊んでいる
最近は周りの子も巻き込んで遊んでいる、子供の遊びと思ってたけど案外楽しいから困る

だが、今日はなのはと遊ぶ約束はない
なのはの家には久しぶりに家族が居るそうなのだが、そんな中俺と遊ぶと言いだしたので無理やり家に居させた
どうやったかは秘密だ？

で、今俺が何をしているかと言うと…

「で？お前はなんなんだ？」

「Ｉ　ａｍ　ｙｏｕｒ　ｄｅｖｉｃｅ（私はあなたのデバイスです）」

「うん、だからそのデバイスって何さ…」

俺がいま話しかけているのはあのカミサマ（キチガイ）からプレゼントしてもらったブレスレットである

先ほどの一文だけを読んだら、一体何のことかわからないと思う

…実際、俺もこんな状況になるなんて夢にも思わなかった

「Ｔｈｅ　ｄｅｖｉｃｅ　ｕｓｅｄ　ｂｙ　ｗｉｔｃｈ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｗｉｌｌ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｃａｎｅ（デバイスと言うのは魔導師が用いる意思を持った杖のことです）」

ブレスレットについている小さな本の飾りから電子的な女性の音声で説明される

「杖？つまり魔法の杖ってことか？」

「Ｉｓ　ｒｏｕｇｈｌｙ　ｃｏｒｒｅｃｔ（大体そんな感じです）」

「でも、お前はなんか杖って言うより本じゃね？」

「Ｉｔ　ｉｓ　ａｌｓｏ　ｃｏｒｒｅｃｔ（それも正しいです）」

「Ｍｙ　ｂｏｏｋ　ｉｓ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｆｏｒｍ　ｏｆ　ｍａｇｉｃａｌ　ｄｅｖｉｃｅｓ，　ｂｕｔ　ｔｈｅ　ｓａｍｅ　ｂａｓｉｃ　ｆｕｎｃｔｉｏｎｓ

（私は魔導書型のデバイスです、しかし基本的な機能は同じです）」

「ふーん、所でその魔法の本が俺に何の用なんだ？」

「Ｙｏｕ　ｗｉｌｌ　ｎｏｗ　ｂｅｃｏｍｅ　ｔｈｅ　ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　ｍｙ（あなたは今から私のご主人様になってもらいます）」

「……俺にそんな性癖はないぞ」

「Ｎｏ，　ｔｈｅ　ｏｗｎｅｒ（違います、所有者です）」

「つまり持ち主になれってことか？」

「Ｙｅｓ，　ｔｈａｔ' ｓ（はい、そのとうりです）」

「ふーん」

（どうしたもんか…）

とりあえずこうなった経緯を説明しよう

〜　回　？　想　〜

「ふわぁ～」

ここは俺『達』の寝室だ
と言ってもシングルのベットと二段ベットの間にはカーテンで仕切られていて
俺はシングルベット、そして夏と春が二段ベットで寝ているのである
そんな広すぎるベットで少し早目の目覚めの伸びをしていると誰もいないはずの方向から声が聞こえた

「Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ（おはようございます）」

「ッ！？」

俺は声のしないはずの方向から声がしたので驚く
…だってそうだろ？壁の方からいきなり英語でしゃべりかけてくるんだもん
誰だって驚くだろ？

「…Ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｓｕｒｐｒｉｓｅｄ？（…驚かせてしまいましたか？）」

「！？」

俺は声がする原因を見てさらに驚く
だってカミサマからもらったブレスレットが喋っているんだもん

だが驚いたのは最初だけだ、なんたってカミサマ（自称）からもらった物なのだ
なにが起きても不思議はない

（自称カミサマってホントに神様だったんだな…）

いささか場違いなことを思いつつ家族にばれないように家を抜け出す
外は太陽が昇り始めたころで、まだ少し薄暗い

俺はそのまま近くの林へと赴き
回想前に至るのだ

～回？想？終？了～

「う～ん、持ち主になるのはいいが…、俺魔法なんか使ったことないぞ？」

だって３０歳まで『さくらんぼ』でないと魔法は使えないんだろう？
…俺も３０歳になったらメ◯ゾーマ使うんだとか思ってたのに

そして世界中のリア充を爆発させt…

…話が逸れた

とにかく前世でも今世でも魔法なんか使ったことがないのだ

「Ｐｌｅａｓｅ　ｗｉｔｈ　ｃｏｎｆｉｄｅｎｃｅ　ａｎｄ　ｔｅａｃｈ　ａｌｌ　ｆｉｒｓｔ（ご安心を、一からすべて教えます）」

「ならいいんだが…」

だがふと疑問に思う、
魔法なんか使って何するんだ？

「なぁ、魔法なんか使って何するんだ？」

「…Ｃａｎ　ｂｅ　ｋｎｏｗｎ　ｌａｔｅｒ（…そのうち分かります）」

「ふ～ん」

まあ教えてくれるって言ってるんだから教えてもらうことにする
知っていて損はないからな

その後、魔法の基礎知識を少し教わったところで日が昇り
そろそろ帰らなければならない時間になった

…取り合えず俺が考えていた魔法とは少し違うらしい……

「あら？晃君、どこに言っていたの？こんな朝早くに…」

家に帰った俺を迎えてくれたのは母だった

「うん、早起きしたから家の周りをお散歩してたんだ」
とりあえず子供っぽく当たり障りの無い答えを言っておく
「あらあら、ダメじゃない一人で外を出歩いちゃ」
「…ごめんなさい」
「ホントに、お母さん心配したんだからね？もうしちゃだめよ？」
「うん…分かった」
これまた子供っぽくうなだれる
「じゃあ着替えて朝ごはんにしましょ！」
そう言って立ち上がりながら手を軽く胸の前で叩く
「うん！」
そう言って俺は自分の部屋にかけていく
子供っぽく演技するのは疲れる上にだましている様でなんだかいたたまれない
（お母さん、ごめんなさい…）
心の中で自分の母親に謝りながら
着換えを始める

俺が着替え終わって、リビングに向かった頃にはもうみんな席に座っていた

「あき兄ぃ！おはよう！」

「晃お兄ちゃん、おはようございます」

「夏、春、おはよう」

俺は夏と春に挨拶を返して席に座る

それと同時に母親が朝食をテーブルに並べ終わる

「それじゃあいただきましょうか」

母親がそう言って俺たちは「いただきます」と言って朝食を食べる

その後俺たちは出かける準備を済ませ通園バスに乗って幼稚園に着いた所だ

と、そこへ…

「やあ、奇遇だね同じバスに乗っていたのかい？」

…会いたくない奴にあってしまった

「そもそもこの幼稚園に来るバスはこのバスだけのはずだが？」

「あぁ、そうだった失念していたよ、ということは…」

と意味心な間を開けて男の子（以下変態くん）は喋りだす

「君の存在に気付かなかったのかな？どうも僕は君より目立つみたいだ」

「…」

呆れた俺は無視して教室の方に歩きだす

「ふ…怖くなって逃げ出したか…」

…変態くんがなんか言ってるけど気にしない

所変わって今俺は木陰下に居る

「てか、まじ魔法便利」

と言うのも俺はいつものように木陰の下で昼寝をしていたのだが

別に本当に寝ている訳ではない
実はいまデバイスが作ったイメージトレーニング用の仮想空間に居るのだ
詳しい説明は俺にも理解できないのでここでは省く
そしてここでデバイスにいろいろな魔法の基礎や知識を教えてもらっている
…まぁほとんど理解できていないがな！
話は変わるがデバイスに『いつまでもデバイスって言うのめんどくさいから名前教えて』って言ったら
「始まりの魔導書」って厨二な答えが返ってきたんだ…
つか、余計呼びにくい
「うんじゃあ今日からお前のことは『カノ』と呼ぶ」
「…”ｋａｎｏ”ｄｏ？（”カノ”ですか？）」
「あぁ」
「…Ｗｈａｔ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｍｅａｎｉｎｇ？（意味はなんですか？）」
「ルーン文字で、アルファベットなら『Ｋ』だな、意味は「炎」や「始まり」だよ、『始まりの魔導書』よりはマシだろ？」
「…Ｉ　ｓｅｅ．（…成程）」

そんな感じに雑談などを交えながらカノの説明を聞く
説明を聞いた後の率直な感想だが
なんか魔法って言うより「科学」に近くね？
と思った
そんなことを思っていいたら急に声をかけられた
「そのブレスレット、かっこいいね！」
俺はイメトレ空間（今命名）から抜け出して昼寝をしている自分の
瞼を開けた
そこには短髪で活発そうな女の子がいた
「俺になにか用？」
そう言うと少し笑って彼女はこう言った
「うん、僕以外の転生者がどんな子かと思って様子を見に来たんだ」
その言葉を聞いた瞬間彼女と俺の間の時間が氷付いた

第４話、「俺が魔法で状況がマッハ」（後書き）

英語ってむずかしいね！

晃「お前が馬鹿なだけだ」

そんな馬鹿に書いてもらってる晃君も馬鹿なんじゃあ…

晃「…鬱だ、しのう」

まぁ死んでも得意のご都合主義でよみがえらせるけどね！

晃「うわぁ…」

ってことでいまさらですが主人公は原作知識皆無です

気付けたかたもおおいと思いますが…

晃「それよりあの子誰なんだ？」

ん？最後の子のこと？

晃「あぁ」

本人が言ってたじゃん「転生者」って

晃「あれ…ガチなの？」

まぁね

とまあこんな感じで出てきた三人目の転生者
これからの活躍にご期待ください！

晃「所で変態くんが「俺にもあとがきに出させろ！」って言ってたんだけど…」

……考えとく

第5話、「説明回だが大丈夫か？」（前書き）

だれか感想コメントこないかなーと思いつつ
０件のコメントボックスを見つめる日々…

晃「…ドンマイ」

…だれか感想くれないかなー…（切実）

第5話、「説明回だが大丈夫か？」

停止した時間の中で彼女の声がこだまのように反響する

「僕以外の転生者がどんな子かと思って様子を見に来たんだ」

…別に隠していたわけではない

聞かれなかったので答えなかっただけだ！

しかし、いざ自分が転生者とばれたことに、やはり動揺を隠せない

もちろんばれる様な事はしていない

そう思わせる行動もしていない

だからこそ

「なぜばれたし…」

「なぜって、神様に聞いたから」

そうか

アイツ（キチガイ）のせいか…

「で？君はどんな能力をもらったの？」

「…能力？」

初めて聞くことに疑問を感じ
質問者に聞き返す

「え？もらってないの？」

「え？いや、そんなもん知らないぞ？」

「…え？」

「え？」

なんだか前にもこんな感じのやり取りをしたような感じがする

「で、おふざけはいいから、どんな能力をもらったの？」

どうやら俺がふざけていると思っているらしい

「いや、まじでそんなもんもらってないぞ？」

「うそ、一人一能力あるって神様が言ってたよ？」

「そうなのか？」

って言うかアレ（カミサマ）とそんなに話したことないな…

「うん、この世界（リリなのの世界）に転生したんなら必ず一人一つずつもらってるはずだよ？」

いや、知らんがな…

「ちなみに僕の能力は疲労とダメージの分だけ魔力や身体能力を底上げする『損害補強（リターンブースト）だよ！いい能力でしょ」

女の子はそう言って無邪気な笑顔を向ける

「…能力のことは詳しくないが、それってダメージ受けること前提なの？」

女の子は少し考えて

「うん、そうなるね？」

「…一撃必殺の攻撃が当たったらどうするの？」

「……」

女の子は黙りこむ

「…気合いで何とかなるでしょ！」

（いや、ならないと思うけど…）

たぶん気付いてなかったんだろうな…

「まぁそれはおいといて、君はどうするの？能力分からないんでしょ？」

「あぁ」

「能力分からないと、たぶん困るよ？」

…正直、その”能力”のせいで困りそうなものだが…

「ま、そのうち何か分かるだろう」

「すごい楽観的だね…」

「…逆にその能力とやらを使う状況があるのか？」

すると彼女は同年代とは思えない笑みを浮かべ

「…確かに使うことはないよ、」

だがそこで間を開けて

「…今は、ね」

結局先ほどの活発そうな女の子は名も名乗らず元来た道を足早に戻っていった

（今は…か）

気になるのは彼女が最後に言い残した一言

（後々、戦闘もしくは強力な”能力”を使わなければならない事態に巻き込まれると言うことか…）

そこでさらに複数の疑問が浮かぶ

（戦闘ならば日本（ウチ）と他国（よそ）が戦争でもするのか？そうでないならテロか…、もしくは大規模な自然災害？
それに一人一能力と言うことは俺にも何かしらの”能力”を持っていることになる、それはいったい何だ？）

だが今考えたところで答えが出るはずもなく早々に思考を切り替える

（なんにせよ使えるカード（手段）は多いほうがいい、体はもちろん魔法もしっかり練習しないといけないな…）

後々来る「”能力”をつかわなければ行けない状況」備えて

（はぁ…、問題が出たと思ったら、こうも一気に押し寄せてくるとは…）

そう思いながら運動場に居る守るべき家族を見て

（…前途多難だな……）

そのあと深いため息を吐いて教室に戻った

ちなみに
「主人公馬鹿だと思ってたけど案外考えてんだなｗｗ」って思った人
…机にうつ伏せになって手をあげなさい、先生怒らないから！

そんな誰に向けたのか分からない質問（犯人探し）を胸の奥にしまう頃にはもう幼稚園の終わりの時間が迫っていた

「あき兄ぃ！今までどこに居たの？」

「ん？いつもの所だけど？」

「…ホントですか？晃お兄ちゃん」

「…ウソついてどうするんだよ」

『…』

二人はしばらく目で意思の疎通を諮った後二人同時に頷く

「実は今日二人で幼稚園じゅう探し回ったんですがどこにもいなくて心配してたんです」

「最後にあき兄ぃのお気に入りの場所も探してみたけどいなかったんだよ？」

「そんなはずはない、今日はほとんどずっといつもの木陰の下にいたぞ？」

すると二人は小首をかしげて考え込んで入る

「もしかしたら入れ違いになったのかも…」

「う～ん、そうなのかなぁ～」

（カノ、何が起こったかわかるか？）

俺はカノに教えてもらった『念話』と言う魔法の技術で聞いてみる

（…Ｍａｙｂｅ　ｗｅ　ｗｅｒｅ　ｐｒｏｂａｂｌｙ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｂａｒｒｉｅｒ―（おそらく私たちは結界の中にいたかも知れません））

カノが同じく念話で答える

（…本当か？）

カノとイメトレ空間の中に居た時に結界のことも教えてもらっている

（Ｙｅｓ，　ｗｅ　ｆｉｎｄ　ｔｈｅ　ｔｒａｃｅｓ　ｏｆ　ｍａｇｉｃ　ｉｎ　ｍａｎｙ　ｐｌａｃｅｓ―（はい、ところどころ魔法の痕跡を確認しています））

（…相手は？）

（Ｍａｙｂｅ．．．”ｓｈｅ，”Ｉ ｔｈｉｎｋ―（おそらく…”彼女”だと思います））

俺に話しかけてきた活発そうな女の子の顔が脳裏に浮かぶ
おそらく誰かに聞かれないようにとの配慮だろう

（信用はできないが、警戒だけはしておこう）

（Ａｌｌ ｒｉｇｈｔ，Ｍａｓｔｅｒ―（了解です、マスター））

そう言って念話を閉じると

「まぁ、ちゃんと帰ってきたからいいじゃないか」

そいっていまだに首をかしげ2人でうんうん言ってる夏と春を説得する

「う～ん、ま、いいか！」

「そうですね、今回はきにしないことにします」

「うん、じゃあ帰る支度をしようか」

そう言って三人で支度を済ませバスの迎えが来るまで適当に雑談していた

家にかえった俺たちは久々に早く帰ってきた父親と5人での昼食となった

その後俺は着替えて今朝向かった近くの林に向かう

林に付いた俺はまず結界を張ることにした

「…えっと、たしか『中規模認識阻害結界』だっけ？」

そう呟いた俺を中心に半円形の結界が広がるのを感じる

この認識阻害結界（以下、認阻結界）は魔力を持たない一般人を無意識のうちに範囲外へ出させ

さらに使用者の設定した事象を認識させないという物である

この場合「事象」とは範囲内で起きた魔術的要因を持った事柄のことである

…と言っても初めて使ったので精度はカノが制御のサポートをしてくれなければ数秒と持たない上に

阻害率も低く魔法の存在もばれやすいのである

（まぁ、もしもの時の保険見たいな物かな？）

そう思い魔法の練習を始める

まずは体の中の魔力を作る器官「リンカーコア」の制御、つまり「魔力運用」の訓練である

自分の胸の中心辺りにあるリンカーコアで呼吸するように空気中に漂う「魔力素」を取り込み
体内で魔力に変換そして体中に循環させる

これが魔力運用である

これはさほど難しくもなく（イメトレ空間で少しやっていたのもあるが）すぐ違和感なくできるようになった

「ふーん、これが魔力ね…」

そう言った俺の目の前の手のひらには小さな蒼い光の塊のようなものが浮いている

「結構あったかいんだな…」

自分の魔力だからだろうか、蒼い光の塊はほんのりと温かい

ちなみに俺の魔力資質は「ミッド」と「ベルカ」のハイブリッドらしい
…何のことか全く理解できないが

それから魔力運用を中心に魔力の成型、術式や魔方陣などの座学などをしながら夕暮れまで訓練をしていた

…余談だがカノは結構スパルタだった…

「まぁ、一日目だしこんなもんかな？」
少し上がった息を整えながらそう言う
「そろそろ帰ろう」
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，　Ｍａｓｔｅｒ」（了解です、マスター）」

と、帰ろうとした瞬間の出来事だった
結界を解いた瞬間
俺は見覚えのある真っ白な空間の中に居た

「…カミサマか……」

俺の意識をここによんだ者の正体を言い当てる

「ほっほっほ、正解じゃ」

「そうか、じゃあ帰る」

するとあわてて

「まぁ、待たんか！今日は伝えたいことがあっておぬしをここに呼んだんじゃよ！」

すると俺はすごくいやそうな顔をしながら

「どうせ”能力”のことだろ？」

「…なるほど、加奈ちゃんとはもうあったのか…」

加奈ちゃん？

「む？知らんのか？」

「う～ん、心当たりはあるが名前を聞いたないんでな…」

そう言うとカミサマはいかにもそうな杖で軽く俺の頭を小突くするといきなり頭の中に顔写真のようなものが現れた

「！？」

そこに映っていたのは紛れもなく昼間あった活発そうな女の子だった

「この子が加奈ちゃんじゃ、心当たりはあるかの？」

「…あぁ、こいつなら午前中に会ったよ」

「そうじゃったか、ならば話は早いのぅ」

そう区切ってカミサマは再び喋りだした

「実はおぬしにおぬしの能力のことを伝えわすれてのぅ、今日はそれを伝えにきたんじゃ」

「…ご苦労なこって」

俺はここぞとばかりにいやな顔をしながら悪態をついた

「まぁそういうな、それでおぬしの能力なんじゃが…」

「いやもうそれはどうでもいい」

「……何じゃと？」

カミサマはキョトンとした顔で俺を見つめてくる

「だから、能力云々より先に聞きたいことがある」

そう言いながら俺は神様の答えを聞かぬまま声のトーンを落として質問する

「その加奈ちゃんてやつがなんで俺のことを知ってたんだ？詳しく説明してもらおうか…」

それはもう説明を拒めば肉体言語の使用も辞さないとばかりにすごみを利かせて言ってやった

…見た目3歳児だけど

「…それにはすまぬとしか言えんのう」

「……と言うと？」

視線は離さないままカミサマの話に耳を傾ける

「実はあの子にこの世界のことを話しているうちに、ポロっとおぬしの事を喋ってしまってのう…」

「それであいつは俺のことを知っていたのか」

「本当にすまんかった」

そう言って頭を下げるカミサマ

……ちょっとシュールだな

「まぁ、それはいいさ、で？俺以外に後何人転生者がいるんだ？」

昼間の彼女の口ぶりから見て、おそらく俺と彼女だけということはないだろう

それを見越しての質問

「……2人じゃ…」

「…まだ2人もいるのかよ」

まぁだがこれならまだ許容範囲だ
正直後十人単位でいたなら対処できないだろう

「でその2人はどこに居るだ？」

「…すまんがおぬしの事は不可抗力での、これ以上特例を許すわけにはいかんのじゃ…」

それを聞いた俺は「そうか」とだけ答えて

「じゃあ、聞きたいことも聞いたし俺は帰るわ」

「の、能力のことは聞かんのか！？」

「…じゃあカノにメールで送っといてよ」

正直、魔法の杖にメール機能が付いていると聞いたときは驚いた
…いる機能なのか疑問に思ったがなかなか便利である

「神様ならできないこともないだろ？」

「…いやまぁ、そうなんじゃが…」

「ってわけでまた今度」

そう言いながら手を振りつつ意識を手放す

手放す瞬間「能力のことを伝えるために呼んだんじゃがのぅ…」ってカミサマが言ってたような気がしたけど気にしない

第5話、「説明回だが大丈夫か？」（後書き）

というわけで今回は説明ばっかしました

晃「お前には珍しいよな」

まぁね、
しばらくかいたらキャラとか世界感の設定まとめて投稿するけど
今はこんなところかな？

晃「ふーん、で前書きのあれってホントなのか？」

……そこをいじってくるのかい君は…

晃「御託はいいからホントのことなのか？」

事実無根だよコンチクショー！

晃「…（可愛そうな物を見る目）」

そんな目で見ないで！

晃「というわけでこんなかわいそうな作者のために『コメントしてやるぜ！感謝しろ豚野郎！』っていう優しい方がいましたらどしどしコメントしていただけると嬉しいです」

…なんか俺の扱い酷くね？晃君

晃「気のせいだ…」

まァいいけど
というわけでシリアス多めの説明回でした
次話もよろしくお願いします！

晃「で？変態くんのあとがき登場の件はどうなってんの？」

あ……

晃「…忘れてたのか」

うん！（テヘぺろ）

晃「ダメだこいつ早くなんとかしないと…」

第6話、「前振りはこの辺で…」（前書き）

今回なんか異様に長くなって申し訳ない

晃「なんで遅くなったんだ？」

…うん、今度から一話一話考えてから書くよ

晃「？」

なにはともあれ第6話、この章の最終回ですでわ本編をどうぞ

第6話、「前振りはこの辺で…」

神様に呼ばれてから数分後、すっかり日も暮れて辺りは静けさにおおわれている

「…帰るか」

そう呟いて俺は家へ足を向け、歩き出す

家に帰る途中、なのはとよく遊ぶ公園を通った時

かすかにすすり泣く声が聞こえた

「…？」

俺は気になって公園内を耳を澄まして声のもとを探る

「…あっちか」

そう言って特定した声のほうえゆっくり進んでいく

…別に妖怪とかお化けの類が怖いわけじゃないからな！

まぁ、それは置いといて

声をたどって言った先には、小さな人影が見えた

（…誰だ？）

そう思いながらできるだけ物音を立てずに近づく

「…グスッ……グスッ」

近づくにつれて人影がはっきり見えてきた

そこにはいつもの短いツインテールを白いリボンで結んだ

見慣れた少女の姿

「…高町？」

「ッ！？」

声をかけるとなのはの体が一瞬ビクンと震え

そのあとまるで「ギギギギ」という擬音が似合う様に振り返る

「あ…あきらくん？…」

「…他に誰に見えるんだよ」

そう言うとなのはは勢いよく立ちあがりながら長袖で目元をこする

…前にこんな感じの会話をしたような？

「えっと…、こんばんわ…」

「あぁ」

この状況んで先に挨拶ができるのはなのは位なものだと思う

「その…こんな所でなにしてるの？」

「それはこっちのセリフだと思うが？」

「…」

そう言うとなのはは黙りこむ

「その…夜の散歩「また泣いてたろ」……」

なのはが」言い終わらないうちに俺が言い当てる

「…泣いてないよ？」

「なら俺の目を見てもう一度言ってみろ」

「…うぅ」

「で？なんで泣いてたんだ？」

そう言うとなのはは覚悟を決めたのかため息とともに喋りだす

「その…、お兄ちゃんと喧嘩した…」

「それで？」

「怒って家出しました…」

「ほぉう…」

家出か、意外だな

その後話を聞くと

久しぶりに家に居た家族にかまってもらっていたが

そのうちなのはの兄だけがなのはの前で父親のことばかり口にして

いたと
それに怒ったなのはは兄と口論になって「家出する！」と言って家を飛び出したのだそうだ
…まぁ、三歳児なわけだしかまってもらえなければストレスもたまるだろう
（大方、暗くなるまで公園で遊んだ後家に帰らないでここに居たと、それで日が暮れて暗くなって怖くなって泣いていたわけか…）
まだそれほど長い付き合いではないがなのはは「一度決めたら絶対に諦めない性格」
言いかえれば『頑固者』なのだ
（……はぁ、めんどくせェガキだな、）
「じゃあ、行くぞ！」
「へ？どこに行くの？」
「……お前ん家（ち）」

ここはとある家屋の門前
表札には「高町」と書かれた板がはめられている

「ここか…」

そう言いながら俺は表札下のインターホンのボタンを押す
…つま先立ちで足をプルプルさせながら押したのは内緒だ！

ピンポーンと言う音の後玄関一（おそらく引き戸）を開ける音が聞こえる

「なのはちゃん！」

そう言いながら出てきたのは、ポニーテールの若い女性
おそらくなのはの姉か何かだろう

「一体、どこに言っていたの心配したのよ？」

「うん、ごめんなさい…」

うん、感動の再会（プチ）だな！
…まぁ、俺は空気なわけだが…

「…えっとこっちの子は？」

なのはの姉（仮）がこちらに視線を向ける
「はじめまして、八月朔日（ほずみ　あきら）　晃と言います」
「えっと、お友達なの…」
「あぁ、あなたが晃君？なのはから聞いてるわ、確か妹さんと結婚するんですって？」
……一体何を話したんだ
「…しませんよ？」
「あら？そうなの？」
なのはの姉に言いながらなのはに微笑む
…後日なのはが「あの時の晃君笑ってたけど笑ってなかった！」と言われるのは内緒だ！
「なのは！」
そこへまた家から誰かがやってくる
中学生くらいだろうか、それくらいの少年がこちらに駆け寄ってくる
「なのは！どこにいたんだ！？」
少年はなのはに近づくなり怒鳴る
「……」

途端になのはの顔が少年から逸れる

（あぁ、こいつか、ケンカしたのって…）

分かりやすい反応だなと思いつつ事の成り行きを見守る

「突然怒って出て行くからみんな心配したんだぞ！？」

…ケンカの原因に気付いてないようだ

言っていることは間違っていない、だが…

「すいません、ちょっといいですか？」

「ん？君は？」

俺は我慢できなくなって話に割って入る

「高町さんがこうなった原因に気付いていますか？」

「え？…いや……」

「原因はあなたですよ？お兄さん」

「は？」

「高町さんのお父さんはいま入院中だそうですね？」

「あぁ、それがどうしたんだ？」

「心配するのはいいですが、せっかく家族でいる間くらい我慢できないんですか？」

「な！？」

どうやら自分がケンカの原因であると今さら気付いた様だ

「ホントなのか？なのは」

少年はなのはに問いかける

「…だってせっかくみんないるのにお兄ちゃん、お父さんのことばっかり考えてるんだもん…」

「……」

そんな時、不意に背後から声が聞こえた

「ふむ、何やら面白いことになっている様だね」

『！？』

そこにいた全員が驚いて声のした方に視線を向ける

「士朗…さん？」

（しろうさん？）

視線の先には松葉杖をついた２０代後半んくらいの男性が立っていた

「そんなに小さい子に論破されるようではまだまだ修行が足りないな？恭也？」

「ッ！？…すいません父さん」

（父さん？って高町のお父さん！？）

「えっと、入院していたと聞いていたんですが…」

「あぁ、そうだよ？」

「じゃあ、なんでここに…」

そう言うとなのはの父はなのはを見ながら

「なのはが家出したと聞いてね、心配になって病院を抜け出して探していたんだ」

なんてことを言い出した

抜け出すって相当心配してたんだな、さしづめ親ばかの類か…

「どうやら原因は恭也にあるようだな」

そう言うとなのはの父は恭也と呼ばれた少年を見据える

「いつもならケンカ両成敗何だが、今回は恭也が悪いみたいだな」

そう言われてなのは兄は黙りこむ

「まぁ、それは後で話すとして…」

そこでなのは父は俺に視線を向ける

「君にはお礼を言わないといけないな、なのはを見つけてくれてありがとう」

そう言いながら俺の頭をなでる
大きくて無骨だけどとても優しく温かい手だった

「それに今日はもう遅い、お礼と言ってはなんだが家まで送ろう」

「…でも病院は」

「なに君を送った後に帰ればいいさ」

そう言ってなのは達に別れを告げて帰路に就く
家に帰った時になのは父に事情を話してもいらわなければ俺の晩御飯がやばかったのだが
その話はまたの機会に…

その後数週間後になのは父が退院した

それを期になのはは俺に「名前で呼んでほしいの！」とことあるごとに要求してきた

何でも家族と一緒に居るときにそう呼ばれるとややこしいからだそうだが…

うん…考えておこう

それから、変態くんがなのはの周りに現れるようになった

俺となのはが遊んでいるとすごい形相でにらんでくるが…

俺、何かしたっけ？

他には魔法の訓練もほとんど欠かさず続けている

もう大体の魔法ならば制御も発動もできるようになった

他にはなのはの家が道場をやっているそうで格闘技の基礎を教わったりした

ただ、できなかったときに容赦なく奥義決めるのは勘弁してほしかった…

そんなこんなで早くも6年が経とうとしていた

いろいろあったなー…

主に変態くんの件で…

いやだっていきなり呼び出されたかと思うと
「『俺の』なのはに手を出すな！」
とか
「君になのはの隣に立つ資格はない！」
とか言われたんだもん…
とりあえずアレには病院に行くことをお勧めしておいた
そんなわけで俺もついに小学3年生だ
白い短パンの制服と言うのがいまだに納得できないが
…まぁ、慣れたよ
ちなみに学校の名前は私立聖祥大学付属小学校という
親には学費、子には学力が結構高く要求される
いわゆる金持ちの通う学校である
と言っても勉強とか俺には思いだす作業でしかなかったが…
なのはからは「なんで出来るのー！？」とわけのわからない疑問を
投げかけられたが
…中身高校生（実際はもう大学を卒業していても問題ない年齢）な
のだからできないほうがおかしい
まぁ、そんなこんなでいよいよ今日からは小学3年生だ
3年生の教室には席順とクラスメイトの書かれた紙が張り出されて

いる

「あ！晃くーん！」

教室に入るなりなのはがこちらに駆け寄ってくる

「また同じクラスだね！」

「あぁ、そうみたいだな」

「何よ、あんまり関心ないみたいじゃない」

そう言ったのはなのはの横に立つ金髪ロングの少女

「そんなことないよ、バニングス」

「ほんとかしら？」

「まぁまぁ、アリサちゃん、晃君も違うって言ってるし」

そう言ってのはなのはの片側に居る少し蒼み掛った黒髪ロングの少女

「そう言うことだ、な？月村？」

「むー…」

そう言うとアリサは頬を膨らませてこちらを軽くにらんでくる

そうこうしていると後ろから奇声が聞こえてきた

「あ”ぎ兄ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！」

「ごふッ！」

いきなり背中に体当たりをぶちかました妹、夏は鼻水と涙でぐちゃぐちゃにっていた

「…どうしたんだよ」

「すいません、晃お兄ちゃん」

「春？何かあったのか？」

いつの間にか現れたのか俺の横に春が立っていた

「実は私たちは晃お兄ちゃんとは別のクラスになってしまって…」

「うぅ、あき兄ぃさみしいよぅ！」

うん…何というか、この場合「で？」っとか言ったらダメなんだろうなー…

「休み時間に顔出せばいいよ…」

「うん！ぜったいだよ！？絶対絶対だよ！？」

「分かったからこれで顔拭けよ…」

そう言いながら持ち合わせたいたポケットティッシュを渡す

その後夏と春は自分の教室に戻って行った

すぐ後に俺達の担任と思しき女性が入ってきた

こうして俺たちの新しい一年が始まった

…だがこの一年が運命の始まりとも知らずに

第6話、「前振りはこの辺で…」（後書き）

晃「…何か言いたいことは？」

えと…すいません

晃「なぜこうなった？」

その…ひとえに作者のせいです

晃「まあ、この作品はお前の処女だからある程度は分かる」

はい…

晃「だが、今回のこれはなんだ！詰め込み過ぎ！走りすぐ！それに御都合主義もいいとこだ！」

ひぃ！？すみません！

晃「…遺言だけは聞いてやる」

え！？ちょ！！眼が本気！？

零崎晃織（あきおり）「殺してバラして並べて揃えて…晒してやんよ」

えぇぇぇぇ！？零崎化！？

晃「って茶番はこの辺にしておいて」

はい
今後も精進していきますのでこれからもよろしくお願いします
晃「…すっかり土下座が板についてきたな…」

あ、ちなみに変態くんはあとがきに出しません
晃「え？なんで？」
え？出してほしいの？
晃「…」
…
まぁ、次話をもよろしくお願いします…
※コメントにてなのはが魔法にかかわるのは3年生とあり
調べてみた結果そうだったので修正しました
今後も誤字脱字がありました遠慮なくご指摘ください
ご迷惑をおかけします

第7話、「魔道師との遭遇、ただし顔見知りみたいな？」（前書き）

今回から無印原作（むじるしようひん）にに突入です！
久々になのはのＤＶＤ引っ張りだしてきました

晃「なのはの晩御飯のシーンと夜の街を走るシーンは神作画だった」

とりあえず本編をどうぞ！

第7話、「魔道師との遭遇、ただし顔見知りみたいな？」

俺たちが3年生になって数週間

今は自分の将来や街の職業などについて勉強している

「この前みんなに調べてもらったように、この街にもたくさんのお店がありましたね」

担任の女性教師が『お店しらべのまとめ』と書かれた黒板を示しながら話す

「そこで働く人たちの様子や工夫を実際に見て、聞いて大変勉強になったと思います」

勉強自体は思いだすだけの作業だがこういうこの学校独自の授業は結構面白いから困る

「このようにいろいろな場所でいろいろな仕事があるわけですがみんなは将来どんな仕事に就きたいですか？

そう言っていったんてに持っていたチョークを置いて

「今から考えてみるのもいいかもしれませんね」

そう言ったすぐ後に学校の授業終了の鐘が鳴る

そして今日の日直が号令をかけてこの授業は終わった

「将来かー…」

なのはがそういいながら蛸の形に切り取られたウインナーを食べる

「アリサちゃんとすずかちゃんはもう結構決まってるんだよね？」

ここは屋上で今は昼休み俺達６人はここでお昼ご飯の弁当を食べていた

「ウチはお父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強して後を継がなきゃぐらいだけど？」

そう言いながらアリサはすずかに視線を向ける

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいなと思ってるけど…」

「そっかー、晃くん達は？」

そう言ってなのはが答えを求むように視線をこちらに向けてくる

「私はあき兄ぃのお嫁さん！」

「じゃあ私は晃お兄ちゃんの愛人でいいですよ？」

「…お前等はなんの話をしている？」

なんか最近春と夏のテンションがおかしい

「別に将来なんかまだ先でもいいだろ、お前等は精神的に育ち過ぎだ」

「あんたに言われたくないわよ！」

「まぁまぁアリサちゃん、落ち着いて」

俺の発言にアリサが怒ってすずかがなだめる、いつもの光景だ

「そっか―みんなすごいよねー…」

あれ？今までの会話全否定ですか、そうですか…

「でもなのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

落ち着いたアリサがなのはに問いかける

「…うん、それも将来のヴィジョンの一つではあるんだけど…」

なのはは少しうつむきながら答える

「やりたいことは何かある気がするんだけど、まだそれが何なのかはっきりしないんだ」

そう言いながらなのはの顔が険しくなる

「あたし、特技も取り柄も特にないし「バカチン！！」え？」

アリサはなのはがいい終えると同時にスライスレモンをなのはの頬に投げつける

「自分からそういうこと言うんじゃないの！」

「そうだよ！なのはちゃんにしかできない事きっとあるよ？」

アリサとすずかがなのはの発言に反論する

「大体、この馬鹿は別として理数の成績なら『この』あたしよりいいじゃないの！」

馬鹿って言われた…

いくら金持ちの小学校で高レベルの授業してても所詮小学校、

高校までの過程をまじめにおさめたやつが全教科満点とれないはずがないだろ？

「それで取り柄が無いとか、どの口が言うわけ！？」

そう言ってアリサはなのはの口の両端をつかみ横に引っ張る

「らっへ、なろはふんけいにがてらし、らいふもにらてらしぃ

（だって、なのは文系苦手だし、体育も苦手だしぃ）！！」

その後すずかの制止もむなしく、俺たちは屋上に居た他の生徒の注目の的になっていた

ただでさえ目立つのに…

今は下校途中、話はすずかの体育の時の話になっていた

途中子犬に吠えられたアリサが「Ｂｅ　Ｑｕｉｅｔ！」って叫んでいたが

別に英語である理由はなかったと思う

「あ！こっちこっち、ココを通ると塾に近道なんだ！」

「え？そうなの？」

「ちょっと道悪いけどね」

アリサ達はそう言いながら脇道へ入っていく

「じゃあ今日はここまでだな、また明日」

「じゃーねー！また明日ー！」

「また明日です」

俺たちがそう言うと

「うんじゃーねー」

となのはがいってそこからは別々に帰って行った

家に帰った俺達は特にすることもないので自分の時間に当てている
俺は近くの林に認阻結界をかけていつものように魔法の練習をしている

「…さて今日もいつものメニューでいいかな」

そう言って俺はデバイス(カノ)を取り出す

「Ｓｔａｎｄｂｙ　Ｒｅａｄｙ？」

「『始まりの魔導書』セットアップ！」

そう言うと途端に光の膜におおわれ先ほどとは全く違う服装に包まれた俺がいた
全体的には白く所々に金色の飾りが縫い付けられている
肩から伸びた体を覆うローブの下は長ズボンに半そでこちらも色は白が基本だ
手には少し厚い本の形になったカノが握られている

…まぁ、男の変身シーンとか誰得なので省略

「調子は？」

「Ｇｏｏｄ」

その後魔法の訓練を行った
内容は俺が今までしてきたメニューで
最初は誘導弾の制御、飛行、身体強化による接近格闘（魔法の世界ではストライクアーツ？って言うらしい）

そのあと、最後にカミサマからもらった『能力』の訓練もしている
訓練が終わった後は認阻結界を解いて家に帰る

もちろん、カノはいつものブレスレットの形（待機モードと言うらしい）に戻っている

家に帰って晩御飯を食べた後、自分の机の前で宿題を片付けていた頃である

「？」

急になんか言い表せない違和感を感じる

「聞こえますか？僕の声が、聞こえますか？」

いきなり頭の中に声が聞こえる

（なんだ！？これは！）

「…聞いてください、僕の声が聞こえるあなた！お願いです！僕に少しだけ力を貸してください！」

（カノ！どうなっている！）

（Ｄｏ　ｎｏｔ　ｋｎｏｗ，　ｂｕｔ　Ｉ　ｔｈｉｎｋ　ｔｅｌｅｐａｔｈｙ

（分かりませんが、おそらく念話かと思います））

「お願い僕の所へ！…時間が、危険がもう……」

そう言って念話が切れる

俺はすぐに立ち上がって窓から念話の会った方へ向かおうとした

…少しだけ残った宿題に気を取られたのは内緒だ！

しばらく飛ぶと念話が飛んできた方で結界がはられたとカノが知らせてくれた

（チッ、もう始まってんのかよ！）

内心舌打ちしつつ自分の出せる全速力で現場に向かう

現場に到着すると、動物病院らしき建物の塀が粉々に破壊されていた

「…遅かったか」

しかしさらに少し離れたところで『ドオォン！』と言う音が聞こえた

「あっちか！」

俺は再び移動を開始する

到着するなり俺は眼を疑った

「何だよあれ…」

俺の視線の先には黒いもさもさした謎の生物が地面にめり込んでいた

…あんなの食えねぇよとか内心場違いな感想を抱きながら周囲を確認する

すると電信柱の近くに一人の少女が跪いている

その向かい側にはクリーム色のでかいネズミがいた

「何やってんだよ！」

俺は助けに入ろうとする、しかし手が届く寸前でピンク色の光の柱が目の前に現れる

「ッ！？」

俺はとっさに回避して近くの民家の屋根に隠れる

「まさか、セットアップ？」

そう言うと少女は赤いビー玉サイズのデバイスに口づけをする
そこから七色に光る光におおわれ、次々と少女の服が光に消えていく
そして…裸の少女の手のひらに構築されたワンド型のデバイスが握られる
握った手から覆う様にバリアジャケットが構築される

「……エロい」

思わず口走ってしまった

まぁ、それは置いておいて目の前に現れた魔導師の顔をよく見ようと眼を凝らす
理由は俺と同じ転生者である可能性があるため、

だが顔を確認した時、今回二度目の眼を疑う事実になった

「え？高…町？」

そうそこに居たのはいつも学校で見慣れた顔だった

第7話、「魔道師との遭遇、ただし顔見知りみたいな？」（後書き）

というわけで原作突入ですよ！

晃「これからはいつも以上にｗｉｋｉに頼る形になるな

ＤＶＤも今は見れるし問題ないのぜ！

晃「所で俺の能力、いつ出すんだ？」

ふっふっふ、まだ出しませんよ…

ただ一方通行（アクセラレーター）に似ているとだけ言っておきますよん

晃「なのは世界でアクセラってめっちゃ固いやん！」

まぁ、その辺は今後のお楽しみということでｗ

というわけで第七話でした！

次回は戦闘の予定です

では、次話もよろしく！

晃「所で最近変態くんの出番少なくね？」

大自然の淘汰にはたとえ変態くんも逆らえないのさ…

晃「つまり忘れてたのか…」

ごめんよ変態くん！『いつか』出番を上げるから！

第8話、「盗み聞き？いいえＯ？ＨＡ？ＮＡ？ＳＨＩフラグです」（前書き）

どうしてこうなった

晃「うぉ！どうしたいきなり！」

前に「話数を重ねるごとに文字数が増える」って言ったよね？

晃「あぁ、それがどうした？」

まぁあとがきで書きますよ…

晃「…ホントに何なんだ？」

第8話、「盗み聞き？いいえO？HA？NA？SHIフラグです」

（カノ！今すぐ顔と声を変えられるか！？）

（Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ（もちろんですマイマスター））

そいうと一瞬だけ魔力の光が全身をつつみこむ

その光が晴れた時には黒髪で声色の変わった俺がいた

ご丁寧に目元を隠すためのマスクまで付いている

そして突然の状況でわたわたしているなのはの前に移動する

そこへ毛玉（今、命名）が飛びかかってくる

『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ（プロテクション）』

俺はカノを目の前に突き出し障壁を張る

「馬鹿野郎！なにぼさっとしてんだ！」

「ふえ！？」

「あ、あなたは！？」

一人と一匹が驚く

俺もでかいネズミが喋ったことに驚きつつ「あぁ、魔法か」と内心勝手に納得する

「説明は後だ！これはどうやったら止まるんだ！？」

「え、えっと、封印すれば大丈夫です！」

いやその封印が分かんないんだけど…

「取り合えず俺が時間を稼ぐ、その間に封印しろ！」

うん、分かんないから丸投げです

すると障壁の魔力に耐えられなかったのか毛玉が四散する

しかし毛玉はすぐに破片を集め再生する

「ったく、往生際が悪いな…」

そう言いながら俺はカノを構える

後ろにいたなのはも少し離れた位置でネズミから説明？を受けている

しかしなのはの方に気を取られていて毛玉がなのはの方に飛びかかる

『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ（プロテクション）！』

しかしなのはも障壁を張って攻撃を防ぐ

「チッ！」

『ｓｅｉｚｅ（シーズ）　Ｂｉｎｄ（バインド）』

カノのページが開いてそこからさらに光の鎖が毛玉を絡め取る

「いまだ！」
そう言ってなのはの方に合図を送る
するとなのはは
「リリカルマジカル！」
って言いながらきらきら光りだす
…光る必要はあるのかと思うが、きっと光らないといけない事情があるんだろう
うん、考えないでおこう
さらになのはのデバイスの一部がスライドしてなんかピンクの翼が三枚生え
そしてなのはのデバイスからピンクの帯上の何かがさらに毛玉を絡め取る
からめとられた毛玉の額に『ＸＸＩ[21]』と出てきた
「リリカルマジカル！ジュエルシードシリアル２１、封印！」
『ｓｅａｌｉｎｇ』
今度はまたピンクの紐みたいなのが毛玉を貫く
…貫通してるしかなり痛そうだ…
そして貫かれた毛玉はピンクの光になって消えていった
どうやらやっと終わったらしい

「あ…」

なのはは毛玉の居た場所に視線を向ける
そこには手のひら大の宝石のようなものが転がっていた

「これがジュエルシードです、レイジングハートで触れて」

すると種石（ジュエルシード）はなのはのデバイスに音もなく吸い込まれる

『ｒｅｃｅｉｐｔ　ｎｕｍｂｅｒ　ＸＸＩ』

するとなのはの体が「また」ピンクの光に包まれる
光が消えた後、なのはは私服姿に戻っていた

「…どうやら終わったようだな」

そう言うと俺は早々に飛行魔法で立ち去ろうとする

「待ってください！」

なんかネズミが声をかけてきた

「…なにか？」

俺が宙に浮いてることに驚愕しているなのはをほっといてネズミが
喋りだす

「あなたはいったい何者ですか？」

うん、すっごい睨まれてる
俺なんか悪いことしたかな？
「…ただの通りすがりですよ」
そう言ってごまかしてみたが
「まじめに答えてください！」
「そんなことない俺は至極真面目だよ？」
まぁ、ただの戯言だ
「ウソです！あなたの魔力量、すこなく見積もってもSS（ダブルS）ランク、しかもさっきの障壁魔法と捕獲魔法、あれほどの実力があってただの通りすがりなわけが無い！」
って言われてもカノには「俺の魔力は他人より『少し』多いくらいだ」って聞いてたし
魔法に関してはほとんどカノにまかせっきりだ
それで実力云々言われてもなー…
「…あなたはいったい何者なんですか？」
そう言ってより一層睨みつけてくる
（うん、この状況どうしよう…）
なのはは俺とネズミの間でまたわたわたしてるし

ネズミに関しては『返答次第では、実力行使も辞さない』と言った感じだし…

…

……

……

……あ

（そうだ逃げよう！）

そう思ってカノと念話？で打ち合わせをする

よし準備は上々

さっそく行動だ！

Ｓｅｎｄなのは

「…あなたはいったい何者なんですか？」

喋るフェレットさんがさっきと同じ質問をするけど

白いマントを羽織った黒髪でマスクの子は何にも喋らない

どうしたらいいんだろう、わたし
フェレットさんは黒髪の子をずっと睨んでるし
黒髪の子はマスクで表情が分からないし

ふえ～ん、どうしたらいいの！？

と思ってたら黒髪の子がいきなり私たちの方に指をさしてきたの！

「俺の正体を探るのはいいが…、もうすぐ近くまで来ているぞ？」

えぇええ！？何が！？

ッと思って振り向いてみてもなんにも居なかったなの

フェレットさんも私と同じ方向を見ているけど何にもないみたい

「…！？しまった！」

フェレットさんがそう言って黒髪のこの方へ向き直るけどそこには
黒髪の子はいなかったの！

すると遠くの方で叫ぶ声が聞こえたの！

「俺のことはヤマーダとよべ！ではさらばだ！」

そいって黒髪の子、ヤマーダさんはすごいスピードで飛んで行っち
ゃったの

「ヤマーダ…、一体何者なんだ…」

フェレットさんが何かブツブツ言ってるの
…たぶん偽名だと思うけど今は言わないほうがいいかもなの

Ｓｅｎｄ晃

「まさかホントに引っかかってくれるとは…」

２人同時に後ろを向いたときは笑いをこらえるのが難しかった

今は結界を抜けて家に向かって高速で移動している
カノが言うに『強力なジャミング』をかけながら飛んでいるらしい

「うーん、それにしてもなのはが魔導師だったとは…」

意外である、カノがなのはを診た時は「人より魔力量が優れている」と言われただけである
カノにも魔導師であると見抜けないということは
高レベルの魔導師か隠密性に優れているかのどちらかだ
もちろんリミッター？と言うやつをつければ、多少ごまかせるがカノには見破られる
もし前者であるなら戦闘で突っ立っているのはおかしい
後者である成してもあそこで突っ立っているのはおかしい
隠密性に優れるなら奇襲でもして一発で封印できるはずだ

「う〜ん、考えれば考えるほど分からん…」

そんなこんなで俺はいえに戻りベットに入った

…まぁほとんど一晩中パトカーのサイレンの音で寝付かなかったのだが…

翌朝、

「大丈夫？あき兄ぃ？」

「えぇ、なんだか顔色が良くないいですよ？晃お兄ちゃん」

朝起きた俺は…

否、起きていた俺の顔は酷く悪かったらしい

「あぁ、宿題していたら遅くなって」

そう言ってあくびを一つ

「あんまりムリしちゃいけませんよ？」

「そうだよ？あき兄ぃが病気になったら悲しいよ…」

あーもう可愛いな根畜生！

「大丈夫だよ、春、夏、」

そう言って2人を安心させる

その後、朝ごはんを食べて学校に登校する

登校するにあたって今までつけていたリミッターを強化することとなった

理由はなのはである

今までは加奈ちゃん意外俺が魔導師であるとは知らないわけで

他には魔力を感じるスキルが無いと言ってもいい者しか学校にはいなかった

なのでほとんど魔力を抑制せず、ほとんど形だけのリミッターになっていた

だがなのはが魔導師と分かった今本格的にリミッターをかけないとばれるかもしれないからだ

別にばれたからっと言ってどうこうなるわけではないのだが…

しいて言えば『タイミングを逃した』と言うことだろうか

まぁ、あのネズミに事情を説明するのがめんどくさいのが大半だがな！

で、今は教室に入ったところだ

なのはは先に来ていたんだろう、いつものメンバーで雑談している

「……車……事k……あったらs…壁…壊れ……」

「あの…レット……事かどうか…配で…」

ココからだとはっきり何を言っているか分からないが、おそらく昨日の動物病院での一件だろう

まぁ、その件はなのはが適当にいいわけするだろう
変に事をかき回したくないので俺は話に入らないほうがいい

その後担任が入ってきて授業が始まる

授業が始まって間もなくまたあの時の変な感じがした
そして

『ジュエルシードは僕らの世界の古代遺産なんだ』

…これって確か念話だよね？
なんで聞こえるの？

困惑するがあえてこちらからは何も言わずに聞く体制に入る

『本来は手にした者の願いをかなえる魔法の石なんだけど、力の発現が不安定で、昨夜みたいに単体で暴走して使用者を求めて周囲に危害を加える場合もあるし』

（おいおい、危険だなそりゃあ…）

念話には割り込まず情報を聞き出す

『たまたま見つけた人や動物が間違って使用してしまって、それを取りこんで暴走することもある』

（まじかよ…）

『そんな危ないものがなんでうちのご近所に？』

なのはが念話で尋ねる

まったくもってそのとうりだ

『僕のせいなんだ…、僕は故郷で遺跡発掘の仕事をしているんだ、そしてある日古い遺跡の中でアレを発見して調査団に依頼して保管してもらったんだけど』

そこでいったん切って

『運んでいた時空間船が事故か、何らかの人為的災害にあってしまって、２１個のジュエルシードがこの世界に散らばってしまった』

（時空間船？人為的災害？）

初めて聞く単語に首をかしげる

『今まで見つけられた数はたった二つ、』

『あと１９個かぁー…』

そこで授業終了の鐘が鳴る

（これは相当やばいな…）

もしあのジュエルシード？が暴走すれば、おそらく一般人は怪我では済まないだろう

そんな力が地雷の様に辺りに散らばっているかと思うとぞっとする

しかもそれが自分の大切な人間に牙を向けたと思うと考えたくもない

『ん？あれ？でもちょっと待って？話を聞く限りではジュエルシードが散らばっちゃったのって別に全然ユーノくんのせいじゃないんじゃあ…』

ふむ、あのネズミの名前はユーノと言うのか…

『だけど、あれを見つかてしまったのは僕だから…、全部見つけてちゃんとあるべき場所に返さないとダメだから…』

（ふむ、こんなものか）

俺はそれ以上の情報はないと思い念話を聞くのをやめる

（どうせ高町のことだ強力するって言って聞かないんだろうな…）

なのはは昔から頑固なところがあった

それに正義感も強い、ここまで考えればおのずと彼女の答えも簡単に割り出せる

（仕方ない、利害は一致してるんだし協力はするか）

その後聞こえてきたピンク色の会話にイライラしながら授業を受けていたら、なんだか念話の話題が変な方に行く

『…だけど昨日みたいに危ないことだってあるんだよ？あの時は知らない魔導師の人が助けてくれたけど、次も助けてくれるとは限らないし』

知らない魔導師って俺のことか…

『それにあの魔導師もあんまり信用できない、もしかしたらジュエルシードの力を目当てに僕らを襲うかもしれない』

まぁ、ユーノって言うやつの言うことも間違ってないと思う

でも、そんな力要らないがな！

『そのことなんだけど…、あの子は大丈夫な気がするんだ、なんかとっても頼りになるというかなんというか、とにかく悪い人じゃないと思うんだ』

『でも危険すぎる！僕が回復したらその後のジュエルシードは僕が集めますから！」

『ダメだよユーノくんとはもう知り合っちゃったし、あの子ともまだお話できて無いもん、だから私はまだやめるつもりなんてないよ！』

『でも…』

『それに昨夜みたいなことが御近所でたびたびあったりしたらみなさんのご迷惑になっちゃうし、ね？』

そう言う問題ではないと思うのだが…

なんともなのはらしいというか…

『ユーノくん一人ぼっちで助けてくれる人、居ないんでしょ？…一人ぼっちはさみしいもん、だから私にもお手伝いさせて？』

とそこで午前の授業が終わる

（まぁ予想どうりだな…）

その後下校時間になっても念話が続く

もういい加減うっとうしくなった俺はカノに頼んで念話を遮断してもらう

まぁ、勝手に聞こえてきただけだし盗み聞きじゃ…ないよね？

そんなことを思いながら春と夏の3人で下校している時だった

いきなり悪寒が走る

念話の時の不快感に近いけど確実に別物のなにかだ

（まさか、これがジュエルシードか？）

「夏、春、おれ用事思い出したから先に帰っていてくれ」

「用事って？」

「ごめん急いでるんだ！帰ったら説明するよ！」

そいって俺はいったん来た道を認阻結界を張りながら戻る

（まったく昨日の今日かよ！ちょっとくらい考えを整理させてくれたっていいだろうに！）

そう心の中で悪態をつきながら俺は悪寒のした方へ急いで向かう

第８話、「盗み聞き？いいえＯ？ＨＡ？ＮＡ？ＳＨＩフラグです」（後書き）

というわけで第８話でした

晃「なんか今回結構なボリュームだな」

いや今後のこと考えると今のうちに晃君が原作介入する理由を作った方がいいかなって思ってかいたらこうなった

晃「確かに平均より２０００字近く多いもんな」

うぅ、ひとえに作者の力不足ですよ…

たぶんもっと読みやすくできるはずなのに自分に力が無いばっかりに…

晃「まぁその、アレだ、ドンマイ…」

だがへこたれてる暇はないのです！こんな駄作でも応援してくれる読者様のために精進していこうと思うんだ！

晃「おぉ、珍しくやる気に満ち溢れているな！」

…それじゃあ俺がいつもやる気ない様なかんじじゃね？

晃「え？違うの？」

ちげぇーよ！

というわけでこんなダメ作者ですがこれからも読んでくれたら幸い

です
他にも気付いた点や気になったことなど御座いましたら遠慮なくコメントしてください！
出来る限り返信したいと思います
それでは次話もよろしく！

晃「で？変態くんは？」
実はこっそり本編に出てたりします
晃「え？まじで？どこに？」
ユーノとなのはがであった辺り
その辺の詳しいお話は何か記念枠の候補のうちに入れときます
晃「へー、他には何があるんだ？」
話が進むにつれて増やしていきますが基本的には
・晃と妹達の日常
・加奈ちゃん視点
・変態くん視点

の三つかな？

晃「まぁ記念でやるんだから、いつやるか決めてるのか？」

一応５万ＰＶくらいかな？

晃「ふーん、まぁがんば」

うん頑張る！

それでわ（浅、Ａ、）ノシ

第9話、「え？約束？いいえ、強制です」（前書き）

いったい何があった！

晃「ん？どうした？」

さっき見たらもうすぐ４万ＰＶに達しようとしていたんだ…

晃「まじか！？こんなほとんど作者の自己満足な駄文で！？」

…うん、分かってるけどめんと向かって言われると少々くる物がある
ね…

そんなこんなで第９話です

では本編をどうぞ！

第9話、「え？約束？いいえ、強制です」

現場の神社に着くとなのはとユーノがすでに到着していた
なのは達の目の前には無駄に牙が多い４ッ眼の犬のような何かがいた
「なのは！レイジングハートの起動を！」
「え！？起動ってなんだっけ！？」
（はぁあ！？）
俺はカノをセットアップしながらなのはに近づく
だがなのはの握っていた拳からピンクの光があふれる
駄犬（今、命名）はその光を警戒したなのはにちか付かない
俺はなのはが居る近くの木の裏で様子を見る
しばらく全身を覆っていた光が四散して昨日見たデバイスを持った
なのはがいた
「なのは！防護服を！」
ユーノの声と同時に駄犬がなのはに飛びかかる
『ｂａｒｒｉｅｒｊａｃｋｅｔ（バリアジャケット）』

駄犬が飛びかかった衝撃で砂埃が舞う

「！？」

しかし砂埃が晴れた時には無事ななのはの姿が見えた

（たく、見てられないな…）

俺はなのはに再び飛びかかる駄犬に障壁を張る

『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ（プロテクション）』

駄犬の攻撃を受け止めるが毛玉より攻撃が重い

（チッ！昨日の様にはいかないか…）

「あ、あなたは！」

「ヤマーダさん！？」

なのはとユーノが突然現れた俺に驚く

「驚いている暇があったら目の前の敵に集中しろ！」

そう言うと視線を障壁の方に回す

後ろで「は、はい！」って聞こえた

「ぐおおおおお！」

駄犬が障壁に押されて地面に倒れる
「いまだ！封印しろ！」
そう言うとなのはは杖を掲げ
「リリカル！マジカル！」
その後は昨日と同じように
ピンクの帯が出て、絡まって、締めつけて、うねうねして、封印して終わった
…他意はない
『ｒｅｃｅｉｐｔ　ｎｕｍｂｅｒ　ＸＶＩ』
封印したジュエルシードをデバイスにとりこんで
「ふぅ、これでいいのかな？」
「うん、これ以上ないくらいに…」
やはりユーノは俺を睨めつけたままなのはにこたえる
…だから俺が何かしたかい？
「それでは私はこれで…」
そう言って立ち去ろうとするが
「待って！ヤマーダさん！」

…やはり予想道理というか、なのはに呼び止められる

「なにかな？」

「…今日は、ちゃんとお話してもらうの！」

ですよねー

「…断る、と言ったら？」

「断られても何度でも！」

どうやら引いてくれるようすはない様だ…

「はぁ…、いいだろう答えられることなら何でもどうぞ」

そう言うとユーノが俺に質問してきた

「…あなたはいったい何者なんですか？」

昨日とまったく同じだな

「ふむ、そうだな、この街の住人とだけ答えておこう」

「この街の？」

「そうだ」

するとユーノが

「そんなはずがない！大体この世界にはまだ魔法は知られてないはずだ！なのにそんな高レベルの魔法とデバイスを持っているのはおかしい！」

「そんなことを言われてもな、私は生まれも育ちもこの街だが？」

「…じゃあなんでデバイスを持っているんですか？」

ユーノが立て続けに俺に質問してくる

そもそも話し合いを言い出したのはなのはではなかったのか？

「それについてはノーコメントだ」

「！？なぜです！」

「なぜも何も、このことは私のプライバシーにかかわることだ、そう易々と教えていては私的秘密（プライバシー）とは言わないだろう？」

「クッ…」

ユーンが悔しがっている、

まぁ、『実は神様にもらったんだ』と言ったところで信じるわけもないしな

「えっと、その、私も質問していいですか？」

「…と言うか話し合いを持ちこんだのは君だろう？」

「はい、それじゃあ、」
なのははそう言って何を質問するのか考え始める
そして
「あの、なんで私たちを助けてくれたんですか？」
「気紛れだ、強いて言うなら『利害の一致』かな？」
「利害の一致？」
そこでユーノが食って掛る
「やはりあなたもジュエルシードを！」
「…、君は何か勘違いしてないかい？」
先ほどまでいぶかしい目で見ていたが俺の発言によりさらに睨んでくる
「勘違い？」
「そうだ、私が君たちに協力するのはそのジュエルシードを早く封印してもらうためだ」
「えっと？どういうことですか？」
そこでなのはが俺に聞き返す

「…あんな爆弾のようなものがこの地域に複数あるのは知っている、だが残念なことに封印と言う物の仕方を私は知らない、ゆえにとっとと危険物を取り除いてもらうためにも君たちの力が必要なだけさ」

それにと俺は間を開けて

「あんなものが身内に牙をむけるとなるといちいち安心して夜も眠れん」

事実眠れなかったし

それにこのことに関してはウソ偽りのない事実だ

春達や、両親に危険が迫っていて自分にはそれを止めるための力がある

しかも結果的にとはいえすでにこの事件に関わってしまったのだ

ならばとことんまで行ってやろうと言うのが本心である

「まぁ、家族を大事にする私から見てこの事件は少々目に余るのでな、一時的とはいえ君たちと今後も協力関係となるだろう」

「…本当ですか？」

ユーノはまだ俺を睨みつけている

昼間聞いた話を聞く限りジュエルシードはそれ単体でもかなりの力を持っているということになる

無差別に力を求める物からすれば喉から手が出るほどほしいだろう

それに警戒するのは分かるが、少々度が過ぎないか？

（まぁ、信じてもらおうとは思わんけど…）

「私が君たちに協力する理由は以上だ、他に質問は？無いなら私は帰らせてもらうぞ？」

そう言ってゆっくり飛行魔法で上昇していく

「あ！あの！」

そんな時、なのはが声を上げた

「なんだい？」

なのはは少し口ごもりながら

「次に会ったときは、私に…」

そう言って息を整えながら言う

「私に魔法を教えてください！！」

……はい？

なのははいったい何を言っているんだ？

「…理由を聞いてもいいかな？」

そう言うと、なのははまた口ごもるがやがて意を決し

「その、さっきユーノくんがヤマーダさんはとても強いって聞いたので、それで…」

…うん、ますますわけがわからないよ

「だが、魔法知識を学ぶならそこに居るユーノとやらに任せればいいだろう？」

「えっと、ユーノくんもすごいけどヤマーダさんの方がすごいのかなって思って…」

俺は決死の思いでユーノに視線を向けるが

「僕からもお願いします！」

止　め　ろ　よ

なんでお前まで乗り気なんだよ！、さっきまでの敵対心はどこに行った！？

「ぶつぶつ（ここで彼の実力や能力が見れれば、あるいは…）ぶつぶつ」

なんかユーノがブツブツ言いだしたし

…え？まじで？これは避けられないフラグですか？
そう思いつつやんわりと断ろうと努力してみるものの
「…次いつ会えるかわからんぞ？」
「それでもお願いします！」
「…もしかしたらすっぽかすかも知れんぞ？」
「そうなったら次まで待ちます！」
「…ジュエルシードがすべて集まるまで姿を見せないかもしれないぞ？」
「それでも！」
どうやら何を言っても引く気はないらしい
内心ため息をつきながら答える
「…分かった、次に会ったときに日時と場所を伝えるよ…」
そう言うと目に見えてなのはが喜ぶ
まったく昔から全然変わらんな…
そんななのはの笑顔を背に俺は家の方角に向かって飛び立つ
…まったく厄介なことになったものだ

第9話、「え？約束？いいえ、強制です」（後書き）

とまぁ、第9話でした

晃「確か大事なお知らせがあるんだろ？」

うん、今回いつも読んでくださっているみなさんにアンケートを取りたいと思います

晃「前回、記念枠で投稿するかもしれないと言ったやつだよな？」

えぇ、そうです

・晃と妹達の日常
・変態くん視点
・加奈ちゃん視点

の三つのうち二つまで選んでコメントしていただけると幸いです

ちなみに上記の3つ意外にも
「こんなの書いてほしい」と言うリクエストなども受け付けています
ちなみに期間は2週間
リクエストの内様は随時活動報告の方で報告します
その際コメントのお名前を使う場合があるので、使ってほしくない方は
コメントの何処か、もしくは名前の欄に「匿名希望」と入力してください
もちろんアンケートとリクエスト両方していただいてもかまいません

どしどしコメントしてくださいね

晃「他にも気付いた点や気になる点も遠慮せずコメントしてくれな！」

それでは2週間後にまた会いましょう

次話もよろしく！

（浅、A、）ノシ

第１０話、「『気絶オチ』って語呂が悪いと思うの俺だけ？」（前書き）

晃「あれ？２週間投稿しないんじゃないの？投票するんだろ？」

うん、そのつもりだったけど…

晃「？」

発表した直後から１コメントしかもらえなかったよ…

晃「まじか、ちなみに内容は？」

投票とは全く関係なかったｏｒｚ

晃「えと、まぁ、ドンマイ」

グスッ…それでは本編をどうぞ

第１０話、「『気絶オチ』って語呂が悪いと思うの俺だけ？」

なのはから魔法を教えてほしいと言われた日から数日

あのあとの翌日の夜にもなのはがジュエルシードを封印したようだが俺はあえて見に行かなかった

まぁ、教えてほしいと言われてもある程度はユーノから教わっているだろうし

そう何度も行きたくはない

今日はなのはに誘われて、なのはの父が監督を務めるサッカーチームの観戦に来ている

確か名前は翠屋ＪＦＣだったと思う

「さて、応援席も埋まってきたようですし、そろそろ試合を始めますか」

「ですな」

ベンチの方でなのはの父と相手方のコーチの方が話しているのが聞こえる

その会話の後、選手たちが整列し互いに握手をした後、試合のホイッスルが鳴る

試合もなかなかレベルが高く流石はなのはの父がコーチを受け持つ

だけはあると思わせる
試合も中盤相手のシュートがゴールに迫る
ディフェンスが頭でボールを受け止めようとするが届かない
だが相手のシュートは一人の男子によってさえぎられる

「はぁあああ！」

そう言ってバク転しながらボールを蹴り返す

（なんであいつがココに居るんだろう…）

俺の視線の先で、変態くんが華麗にゴールを守り
そして着地した後、なのはに向かって親指を立て微笑んでいる
なのははそれを見て苦笑している
その隣でアリサが番犬のごとき形相でにらんでいることも
すずかが瞳にハイライトの消えた笑みを浮かべていたこともおそらく気付いていないんだろう
…だがそのあとすぐに戻ってきたボールで顔面を強打したのは内緒だ

その後、翠屋ＪＦＣは前半１点後半１点で２対０の圧勝だった
後半相手チームに１点入れられそうだったがキーパーの活躍により
翠屋ＪＦＣのゴールには一度もボールは入らなかった

そして今は翠屋にて昼食後のデザートタイム
外に出されたテーブルにケーキと冷たい飲み物が置かれている
そのテーブルを囲むようになのは、アリア、すずか、の三人と俺達兄妹が座っている
「それにしても、改めて見るとなんかこの子フェレットとちょっと違わない？」
言ったのはアリサ
今、テーブルの上にはユーノがみんなに囲まれるように座っている
「そう言えばそうかな？動物病院の医院長先生も変わった子だねって言ってたし…」
すずかもアリサに続いて言う
「あき兄ぃは知ってる？この子の種類」
夏が俺に問いかける
「あぁ、知っているぞ？」
そう言った途端なのはが目に見えて焦り始める
おそらく念話でユーノとどうするか相談しているのだろう
「ホントですか？晃お兄ちゃん」

春が確認する

「まぁな」

そう言うとその場に居た全員の視線が俺に向く

「そいつの正体はな、ズバリ、喋るフェレットだ」

言った瞬間なのはとユーノが飛び上がりそうになる

だが…

「あき兄ぃウソはいけないと思うんだ…」

「そうです、晃お兄ちゃん、ウソをつくと後ろから刺されますよ？」

二人がジト目でこちらを見つめる

ただ春のセリフだけ妙に信憑性がある気がする

「大体、フェレットと人間はあごの骨格が違うんだから喋れるわけないじゃない」

「そうですよ？晃君、あんまりウソつくと誰も信じてくれなくなりますよ？」

アリサとすずかも否定する

「…ちょっとした冗談だよ？」

そう言いつつなのは達の方を見るとそっと胸をなでおろいている

「あーえっと、まぁちょっと変わったフェレットって事で…、ほらユーノくんお手！」

そう言ってなのははユーノに手を差し伸べる

「きゅ！」

ユーノはなのはの手に前足を置く

「うわぁぁ、かわいいぃ」

すずかがそんなユーノを見て尾の延びた声を出す

「んー。賢い賢い！」

アリサはそう言ってユーノの頭をなでる

その横からすずかと夏が加わりほとんどユーノの頭がすっぽり隠れてしまう

…少しユーノの鼻の下が伸びている様に見えたのは気のせいだろうか？

しばらくして翠屋の中で食事を取っていたＪＦＣの面々が食事を終えて外に出てくる

「あっ…」

そんな風景を眺めながら6人で談笑しているとなのはが小さく声を上げる

その視線は一人の男の子に向いている
確か彼は翠屋ＪＦＣのキーパーだった子でこではなかっただろうか

（なのははああいうのが好みなのか…）

だがその男の子に向かってくる一人の女の子

「おつかれさま！」

「おつかれさま」

そう言いあって2人で帰っていく
どう見てもカップルだった

なのははその二人を不安そうに見つめていた

（前途多難だな…）

「（恋の三角関係…、ありがちなシチュエーションですがこれはこれで「萌え」ますわッ！）」

…同じ光景を見ていた春がこの世界の言葉以外の語源なんか言ってるが無視する

「はい、なのは！」

「ふえ？」

アリサがなのはに目を回しているユーノを手渡す
…ドンマイユーノ、がんばれユーノ
そう心の中でユーノにエールを送っているとアリサが喋りだす
「さて、じゃああたし達も解散？」
「うん、そうだね」
「そっか、今日はみんな午後から用があるんだよね」
なのはが確認しながら言う
「えへ、おねぇちゃんとお出かけ」
すずかはうれしそうに言う
「パパとお買いもの！」
その次にアリサが勢いよく椅子から立ちながら言う
「私たちは家で家族と居る約束があります」
俺たち三人は家でゆっくりすることになっている
「いいね、月曜日にお話し聞かせてね？」

その後俺たちはなのはと手を振りながら別れる
帰り際にかすかにジュエルシードの気配を感じた気がしたがさほど気にせず帰路に就く

Ｓｅｎｄユーノ

なのはは家に帰ると真っ先にベットに倒れる
「なのは、寝るなら着替えてからでなきゃ…」
「…うーん」
そう言いながらなのははもそもそと起き上がる
そしていきなり上着をたくしあげ着換え始める！
「ふあぁああ！」
僕はとっさに後ろを向いた
（い、いいいいいい一体なのはは何をやってるんだ！？いくら動物形態のだからって僕は男でなのははお。おおおお女の子なんだよ！？）

「ユーノくんも一休みしといたほうがいいよー…」

背後からなのはの声が聞こえる

その間も肌と布がこすれあう音が続く

（ひ、一休みも何もこんな状況で休めるわけないじゃないか！そ、そもそもなのはは僕を男の子としてみてないだろ！じゃなきゃ僕の前で着替えたりなんかしないよね！でもそれだとこれからジュエルシードを集めている間中、な、なのはの下着姿を…いや、お風呂に入ればなのはの体が見放題！？）

「なのはは晩御飯まで御休みなさーい…」

（いや、いやいやいや、ちょっと落ち着くんだ僕！そんなことをしたらスクライヤ家の恥じじゃないか！いくら相手が勝手にやってても そんなことを許容してはいけないんじゃないか！？…でも僕も今まで頑張ってきたし…ちょっとくらいなら…、って何を考えているんだ！！そうじゃない！僕が言いたいのはそんなデリカシーの無いことをしてはいけないってことで！そんなこと僕より小さいこも知ってることじゃないか！…でも頑張ってきたのは事実で、それに対してのご褒美があってもいいよね？そ、そうだ！これはご褒美なんだ！きっと神様からのご褒美なんだ！だからちょっと、ほんのちょっと見て目をそらせばいいそれだけでいいんだ！そうすこし、だ…け？）

気付いたらなのははうつ伏せになり健康的な寝息を立てていた

『すでにパジャマに着替えて』

（……）

「…やっぱり慣れない魔法を使うのは相当の疲労なんだろうな、僕がもっとしっかりしていれば…」

…さっきまで考えていたことは僕の心の最奥に封印しよう、そうしよう

だからがっかりなんてしてない！それはもう世界の終り並みにがっかりなんてしていない！

…でも、少しくらい見てみたかった……

Ｓｅｎｄ晃

（チッ！よりによってこんな時にッ！）

俺の目の前には大きい木の根が何本もアスファルトの地面を割って姿をさらしている

しかもその木の根は徐々にこちらに迫ってくる

「あき兄ぃ…」

俺の背中で春と夏が不安そうな顔でこちらを見つめている
その手は俺の服の端を強く握っているのが分かる

（どうする！？）

十中八九ジュエルシードだろう
だが問題は俺の背中にいる二人だ

（バラすのか？二人に？）

おそらくココで魔法を使えばいいわけなど出来るわけがない
かと言ってココを離れると二人がどうなるか分からない

「考えるまでもねぇじゃねぇかッ！」

そう言いながらカノを取り出す

「あき兄ぃ？何してるの？」

夏が不安そうに聞く

「カノ、封鎖結界」

俺は今発動できる最堅の結界をふたりの周りに張る

「！？晃お兄ちゃん！？これ何！？」

「帰ったら必ず説明する、今はココに居てくれ」

「あき兄ぃ？…」

「大丈夫だココに居れば安全だから、ココで大人しく待っていてくれないか？」

そう言うと二人は不安そうにしているが深くしっかりとうなずく

「…いい子だ」

そう言ってバリアジャケットを展開しつつ飛行魔法でここを離れる

少し上に飛ぶと視界が開ける

そして俺は絶句する

「なんだ…これ…」

そこに広がっていたのは巨大な木だった

地面に根を張りアスファルトもコンクリートも関係なく破壊されている

しかもその木は徐々に大きくなっている

（規模が今までと違いすぎるッ！）

そうこうしている間に木の根はさらに伸びていく

「クッ、まずは木の根の拡大を阻止した方がいい様だ、行けるな？カノ」

『Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ』

カノが言った瞬間、俺の頭の中に呪文が流れ込む
俺はそれを魔力を込めながら詠唱するだけだ

『天駆ける千の風よ、古き大地に宿る精霊達よ、我が言葉にこたえ遠き地にてその者たちを守りたまえ！』

『Ｌｏｎｇ　ａｒｅａ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ（ロングエリアプロテクション）』

詠唱が終わると進行している木の根『すべてに』障壁が張られて進行を阻害する

「…流石に、キツいな…」

この魔法は遠隔的に大多数の攻撃を防ぐために開発された遠隔式多重障壁魔法なのだそうだ

…難しいことは分からん

だがこの魔法のおかげで木の根の進行は止まった
しかし進行は止まっただけだ根本的な解決にはなっていない

「チッ、こうなるなら封印魔法をおぼえておくんだった…」

だがそんな時ピンク色の光球が無数に飛んでくる

（ピンク色…高町か！！）

だがカノがなのは以外の魔力を二つ感知する

一つは幼稚園のころに会った同じ転生者
確か「加奈ちゃん」と神様が言っていたと記憶している
だがもう一方は全く知らない魔力だそうだ
（一体誰だ？）
しかしいま疑問を抱いても答え合わせをしている暇はない
少しでも雑念を払って障壁の維持に集中する
ほどなくして遠くの方で爆発音が響いてくる
そのたびに障壁の負担が減っていく
おそらく加奈ちゃんともう一人が木の根を破壊しているのだろう
そんなことを思っていると頭上をピンク色の柱が駆け抜け木の一部を飲み込む
さらにそこからほどなく二本目のピンクの柱が同じ部分を貫く
先ほどの一撃目とは違い飲み込みそして一気に封印したことがココからでも分かった
「…すげーな…」
そして封印し終わった後木はピンクの光になって四散する
後の町には爪痕だけが残っていた

「春！夏！」

俺は二人に結界を張った場所に向かっていた

到着すると結界にひびが入っていたものの無事な二人の姿が確認できた

「あき兄ぃ！！」

「晃お兄ちゃん！」

「二人とも無事でよかった…」

俺が結界を解くと二人が抱きついてきた

「こわかったぁ！」

「うえーん！」

「あー…、うんごめん…」

二人に抱きつかれながら俺は安心する

…あ、やばい、安心したら目の前がかすれて…

俺はそのまま意識を手放す

「あき兄ぃ！？」

「晃お兄ちゃん！？」

手放した後も夏と春の声が聞こえる

だがそれもだんだん小さくなって聞こえなくなる

（あー…、使いすぎたか…）

そう思いながら俺は暗い空間を落ちて行った

第１０話、「『気絶オチ』って語呂が悪いと思うの俺だけ？」（後書き）

もうね、投票はほとんど諦めたよ…

晃「いきなりだな、おい…」

うん、きっと『所詮５万ＰＶ程度で記念枠するなど方腹いたいわ！』
ってことなんだよ…
だからもう投票結果は先送りにする

晃「いいのか？」

いいのさ、夢だと思えばなんともないし
それに自分の自己満足で書いてるわけだし
これだけ見てくれた人たちに感謝しながらひっそりと書いて行くよ

晃「じゃあ、とりあえずは更新するんだな？」

まぁね、結果はどうあれ中途半端はいやだからね

晃「じゃあこれからもよろしくな」

おう！よろしく頼むぜ主人公！

それでは次話もよろしくお願いします！

第１１話、「ファーストエンカウント」（前書き）

第１１話、「ファーストエンカウント」

Ｓｅｎｄ？

「ロストロギアはこの付近にあるんだね」

何処かのビルの屋上
黒いマントに金のツインテール
黒い斧の様なものを持った少女が声を発する
そのわきには赤い毛並みの大型犬が腰をおろしている

「形態は蒼い宝石、一般呼称はジュエルシード」

少女はその赤い目で町を見下ろす

「そうだね、すぐに手に入れるよ…」

まるで誰かと会話している様に言葉を続ける

（…だから待ってて、母さん…）

小さくそう呟いて少女は闇の中に消える

Ｓｅｎｄｏｕｔ

Ｓｅｎｄ晃

ここはいつもの林

俺がほとんど毎日魔法の訓練で使う場所だ

いつものように俺はココで魔法の特訓をするのだが…

今日は俺一人ではない

「…ホントにやるのか？」

俺が問いかけるのは双子の妹達

「決めたの！私達もあき兄ぃのお手伝いするって！」

「そうです！私達だけのけ者なんていやです！」

「……」

どうして俺の周りの異性ってみんな頑固なんだろう…

そうおもいつつ俺はこうなった経緯を思い出す

気が付いた俺は病院のベットの上に居た

あのあと春と夏が病院まで運んでくれたそうだ

まったく頭が上がらないな

ちなみになぜ倒れたかカノに聞いてみると

いきなり広域魔法を使ってリンカーコアに負担をかけたのが原因だろうとのことだった

いうなれば一気に血液を流し過ぎて一時的な貧血になったと考えればいいそうだ

それ以外はなんの異常もなく、病院側では『一時的なショック症状だろう』と言う風にかたづけられていた

一様、検査入院と言うことで2、3日入院していたが

その間に俺は春と夏に魔法のことを教えた

もちろん俺が転生者であることやなのはが魔導師であることは伏せてある

余計な混乱を避けるためでもある

「つまり、その大きな力の塊みたいなのがこの街にいっぱい散らばってて…」

「それを、集めて封印するお手伝いをしていたんですか？」

「まぁ、要約するとそうだね」

夏と春が要約し俺が肯定する

「それでこれが魔法を使うための杖」

そう言って俺はカノを取り出す

「これが…ですか？」

そう言うとカノに顔を近づける

『Ｈｅｌｌｏ，　Ｗｅ　ｌａｄｙ」（こんにちは、お嬢さん達）』

『！？』

二人はカノが喋ったことに驚く

「しし、喋ったよ！？あき兄ぃ！？」

「結界張る時も喋ったと思うんだけど…」

とりあえず二人を落ち着かせる

その後デバイスがどんなものかと言うことなどを説明する
その途中春からなぜそんなものを持っているか聞かれたが
「神様にもらった」
と答えたらまじめに答えてと言われた
…ウソ付いてないのに
仕方なく気付いたら持っていたことにした
…なんで神様にもらったはダメでこれならよかったのか物凄く疑問
だが気にしない
「と言うことだ」
話終えた時ふたりはなんとも表現しがたい複雑な表情をしていた
まぁ、実際に魔法なんてものを見ていなければ俺が頭でも強く打ったんではないか？と思うような内様だ、
事実、魔法を目の当たりにした二人でさえまだ信じ切れていない
それほど自分の知っている現実とかけ離れたものなのだ
こればっかりは自分の中で心の整理をしなければ解決できない問題
だと俺は思っている
だから退院して家に帰った俺に二人が言った言葉が理解できなかった
『私達に魔法を教えて！』

…俺が魔法のことを話したのは入院3日目
つまり退院の前日である

もちろんその時に魔法を使うことで危険な目に会うということも説明した
ジュエルシードの危険性も目の当たりにしている

だが彼女達が言っているのはそんな危険な渦中に飛び込む行為である
転生者ではあるが二人はもう俺の大切な家族
そんな家族をわざわざ危険な場所に出せるほど俺は馬鹿ではない

故に二人を説得しようと努力してきた

…が、そのどれも二人を説得できなかった
ある日は小一時間魔法の危険性について論した
そしてある日は実際に魔法を使ってどれだけ危険なものかその身で感じさせた

だが、そのどれもが失敗に終わる

そして今に至るのだ

（正直、勘弁してほしいな…）

現実はいつも厳しい

残念なことに（誤字に非ず）二人の魔力はなかなかの物だそうだ
しかも春は魔法の理解も早く訓練開始約１０分程度で魔法の発動から制御までほとんどこなしてしまった
夏に限っては自前の運動神経に魔力の身体強化が加わって、単純な近接格闘ならすでに俺がどうこう出来るレベルでは無かった
しかも驚くことにすべて一日で上記すべてを習得してしまったのだ
もはや才能云々の話ではない
（俺の今までの訓練はいったい何だったのだろうか…）
天災―（誤字にあらず）ってホントに居るんだなー
そんなことを考えていた今日この頃

あれからジュエルシードの気配はなく
ごく平穏な生活を送っていた
ガチャン
背後で扉が開く音がする
「なのはちゃん、恭也さん」
すずかが開いた扉の方へ声をかける
「すずかちゃん！」

俺の背後で声がする

「なのはちゃん！いらっしゃい」

そう言ったのは
すずかの専属メイドのファリンさん
本名は長くておぼえていない

「恭也！いらっしゃい」

「あぁ」

そう言ってなのは兄を歓迎したのはすずかのお姉さん
たしか忍（しのぶ）さんだっけ？

「お茶をご用意いたしましょう、何がよろしいですか？」

そう言ったのはファリンさんの姉でメイド長のノエルさん

「任せるよ」

となのは兄

「なのはお嬢様は？」

「あたしもお任せしまーす」

「かしこまりました、ファリン？」

ノエルさんはそう言うと妹のファリンさんを呼ぶ

「はい！了解です、お姉さま」

ファリンさんは敬礼しながらノエルさんの下に歩いて行く

「じゃあ、私と恭也は部屋に居るから」

「はい、そちらにお持ちします」

忍さんはそう言うとなのは兄の手を握ってノエルさんとファリンさんとともに部屋を出ていく

今日はすずかの家にお呼ばれしている、何でもお茶会をするんだそうで

「俺達そんなのしたことないから礼儀作法とか知らないぞ？」

とやんわりと断ろうとしたが

「別にそんなかたっ苦しいお茶会なんかやらないわよ！」

となぜかアリサに怒られた

「なのはちゃんも来るし、そんなに気にしなくても大丈夫だよ」

そうすずかに論されてしまった

まぁ、内心女の子の家に上がるのが恥ずかしいだけなんだが…

でもそんなことすずかの家に着いて吹き飛んだ

（でけぇ…）

春も夏も同じ心境なのかいささか驚いている

それもさっきまでだが…

「相変わらずなのはのお兄ちゃんとすずかのお姉ちゃんはラブラブだよねぇ」

アリサが言う

「うん」

そしてすずかが肯定しながら忍さん達を見つめる

「おねぇちゃん恭也さんと知り合ってからずっと幸せそうだよ？」

確かに忍さんの表情はとても幸せそうに見える

「うちのお兄ちゃんは、どうかな？」

そう言ってなのはは自分の兄の顔に視線を向ける

「でも昔に比べて、なんだか優しくなったかな？」

「へー、いいなーうちのお兄ぃは全然だよ？昨日も一緒に寝てくれなかったし…」

「うん、それ俺のことだな」

当たり前だ朝起きたら全裸の妹が隣に寝てたら普通引くだろ

「それに最近一緒にお風呂も入ってくれないんですよ！」

「もう一人で入れるだろう？」

背中にまな板押しつけられて一緒に入りたいと思うのは変態だけだ…

「いいんじゃい？兄妹なんだし」

アリサが人の事情も知らないでのんきに言ってくる

「…バニングス、一人っ子のお前には分かんないもんなんだよ特に『兄妹』はな…」

「へーそうなの？」

ココで話に入ってくるなよ高町

「別に私の所は普通にお父さんともお兄ちゃんともお風呂入ったりするよ？」

まぁ普通の家庭なら、な

「と言うわけで晃お兄ちゃん！帰ったら入りましょう！すぐ入りましょう！」

春が「ハァハァ」と興奮で息を荒げながら言う

「そうだよあき兄ぃ！その夜は一緒に寝よう！3ぴ…3人で一緒に…」

夏が「ぐふふ」と奇妙な笑い声を発しながら言う

「…却下」

いやそんな状態で言われてもうれしくないし、むしろ怖いして言うか二人ともなんで手をワキワキさせてんの？気味が悪いよ？

二人の「なんで！？」と言う講義も聞かず話をそらす

「そう言えば最近高町元気なかったけど今日は元気そうで何よりだな」

「そうそう、もし何か心配事があるなら話してくれないかなって…、二人で話してたんだけど」

すずかがなのはを心配しながら言う

「すずかちゃん、アリサちゃん…」

「まぁ、そこのバカも気付いてたみたいだけどね？」

「馬鹿とはなんだ、一応お前らよりは高町との付き合いは長いんだぞ？」

と、言っても元気の無い原因を知ってるだけなのだが…

「晃くん…」

「きゅーーー！」

突然机の下から奇声が聞こえる

「あぁ！ユーノくん！？」

そこではユーノがネコに追いかけられていた

「アイン！ダメだよ！」

すずかがネコを止めようとするがネコは気付かづにユーノを追いかける

そこへ…

「はーい、お待たせしました！苺ミルクティーとクリームチーズクッキーでーす！」

ファリンさんが銀の盆にカップとクッキーの乗った皿を載せた物を持って部屋に入ってくる

そこにユーノとネコが足元で暴れる

「わぁぁぁあああぁぁぁあああ！」

変にユーノとネコを踏まないように足を動かすがそれが原因でふらふらと危うい挙動になる

しまいにファリンさんが目を回してしまった

「おい！あぶなッ！」

「ファリン！あぶなーい！」

そう言ってなのはとすずか、そして数歩遅れて俺が受け止める

「…セーフ」

なのはとすずかがファリンさんを受け止め
俺が落ちそうになっていたカップの受け皿や食器などを受け止める

「うわーん、すずかちゃん！なのはちゃん！晃君！ごめんなさーい！！」

…ドジっ子とは聞いていたが、まさにテンプレ通りだった

その後場所を変えて今は裏の大きな庭の真ん中に机と椅子をおいて談笑しながらのティータイムになる

そこでの話題は、「月村家はネコ天国」と言うことや「ネコの里親が決まってさびしい」と言うことなど主にネコに関してだった

『（！！）』

だがそんな平和な時間も一瞬にして幕を閉じる

（あき兄ぃ、なにこの感じ…）

（なんだかとても異質な感じが近くにあるように思います…）

おそらく夏と春も気付いたのだろう

（…ジュエルシードだ、）

俺は二人に念話で感じた気配の正体を言う

（恐らくかなり近くだ…）

俺はなのはに気付かれずに視線を向ける

たぶん向こうも気付いているだろう

ならば下手に動かなくていい、しかも方向からして庭の林の中

だとすれば最悪、人間が発動させることもないだろう

（どうするの、あき兄ぃ…）

（…待機だ）

（見に行かなくていいのですか？）

と言ってもどうせなのはが動くだろうし

こちらも動けばなのはに怪しまれるどころかすずかとアリサにも怪しまれる

兄妹全員と成ればなおさらだ

（…言っただろう？俺の他にアレを封印している奴がいるって、そいつも近くに居るから対応するだろう）

ちなみに二人にはなのはのことを伝えていない

（それに万が一にも何かあったら俺が行くさ）

（あき兄ぃがそう言うならいいけど…）

「ユーノくん！？」

なのはがいきなり叫ぶ

見るとユーノがなのはの手から逃れて林の方へ走っていく

「あらら？ユーノどうかしたの？」

アリサがなのはに問いかける

「うん、何か見つけたのかも…ちょっとさがしてくるね！」

「一緒に探しに行こうか？」

すずかが提案するが

「大丈夫！すぐ戻ってくるから待っててね」

そう言ってなのはも林の方へ駆けていく

（！晃お兄ちゃん！？）

（大丈夫だ、あいつも馬鹿じゃないだろうし、結界くらい張るだろう）

この場合あいつとはなのはのことになるのだが
夏達はなのはが魔導師とは知らない、
なので架空の誰かが対応すると考えたのだろう

なのはとユーノが林に消えてほとんどすぐにジュエルシードの発動と結界の発動を感じ取れた

（とにかく、今はココで様子見だ）

そう念話で二人に言って現実の世界に意識を向ける

Ｓｅｎｄなのは

いま私はすごく驚いているの…

「にゃーん」

私とユーノく

んの目の前にとっても大きな『子猫』さんがいるの…

「あ、あれは？」

私は思わず独り言のような疑問を発してしまうくらい不思議な光景なの

「た、たぶん、あのネコの大きくなりたいって願いが正しく叶えられたんじゃないかな、と」

誰に向けた疑問じゃなかったけどユーノくんが答えてくれたの

「えーと…、そっか…」

なんだか大きくなるの意味を間違えてると思うの…

「だけど、このままじゃ危険だから、元に戻さないと！」

確かにあの大きさでじゃれてこられたらぺちゃんこになっちゃうの

「そうだね！流石にあのサイズだとすずかちゃんも困っちゃうだろうし…」

そう言うとネコさんと目があったけどなのもしてくる様子はなさそう

「襲ってくる様子はなさそうだし、ササッと封印を、」

そう言って私はレイジング（デバイス）ハートを取り出すの！

「じゃあ、レイジングハート！…」

デバイスを起動しようとしたその時いきなり後ろから黄色くて速い光がネコさんに当たったの！
私は驚いて光が飛んできた方を振り返ったの
そしたら遠くで電信柱の上に居る誰かがネコさんに攻撃していたの！
「バルデッシュ、フォトンランサー連撃」
『Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ　Ｆｕｌｌ　ａｕｔｏ　ｆｉｒｅ．』
私と同い年くらいの子はまたネコさんに向かって魔法を使ったの！
「なッ！魔法の光！？そんな…」
ユーノくんも気付いて驚いてるの！
「レイジングハート！お願い！」
『Ｓｔａｎｂｙ　ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　ｕｐ．』
私は急いでレイジングハートを起動させてバリアジャケットに着替えるの
…いつも思うけど着替える時、誰かに見られてないかすごくドキドキなの
『Ｆｌｉｅｒ　ｆｉｎ』
バリアジャケットに着替えた後、ネコさんを守るためにネコさんに

近づいてバリアを張る

『Ｗｉｄｅ　ａｒｅａ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

バリアを張ると同時にさっきの黄色い光がたくさん飛んできたけど、全部防げたの！

でも油断してたらネコさんの足元に黄色い光が当たってネコさんが倒れたちゃったの

ネコさんの上に乗っていた私も一緒に倒れそうになるけど空を飛んでどうにか地面に着地したの

そしたら目の前の木の枝の上にさっきの黄色い光を撃った子が現れたの

「同系の魔導師…、ロストロギアの探索者か…」

そこに居たのは女の子だったの！

「間違いない、僕と同じ世界の住人…、そしてこの子、ジュエルシードの正体を…」

後ろでユーノくんが呟いてる

「…バルディッシュと同系のインテリジェントデバイス…」

「バルディッシュ…？」

たぶんあの子のデバイスの名前なのかな？

「ロストロギア、ジュエルシード…」

『Ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ　Ｓｅｔｕｐ』

そう言うとあの子のデバイスの一部が変形して黄色い光の鎌みたいになったの！

そしてその子はデバイスを構えて

「申し訳ないけど…いただいて行きます…」

そう言ってデバイスで切りこんできたの！

『Ｅｖａｓｉｏｎ　Ｆｌｉｅｒ　ｆｉｎ』

レイジングハートが魔法を使ってくれなかったら今頃踝からしたがなかったかも知れないの

私は空を飛んで距離を取って次の攻撃に備える

でも甘かったの

『Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ』

あの子が素振りをするようにデバイスを振ると鎌の刃の部分がとれて回転しながら飛んできたの

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

「なのは！」

飛んできた刃をバリアで受け止めたんだけど、威力も強くて受け止めるのが精いっぱいなの
私は一気に上昇したけど、そこにはさっきの子が待ち構えていて
刃が爆発した時の煙から出た瞬間に切りかかってきたの
「なんで…」
分からなかった、
だから自然と聞いてしまった
「なんで、急に…こんなッ！」
でも目の前に居る子はとても悲しそうな目をしながら
「答えても…、たぶん、意味は無い…」
そう言ってあの子のデバイスに力がこもる
私も負けないように力を入れるけど押し負けて…
「きゃぁぁああ！」
私は地面にたたきつけられた
あの子はまだ空に居て鎌を仕舞ってデバイスをこちらに向ける
私は痛む体を起こそうとしながら悲しい目をした金髪の子を見つめる
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　ｌａｎｃｅｒ　Ｇｅｔ　ｓｅｔ』

その間にあの子のデバイスの先端に黄色い光が出来て野球ボール並みに大きくなっていく

「…ごめんね」

『ｆｉｒｅ！』

あの子がそんなことを言ったような気がしたそんなことを考えた瞬間黄色い光が打ち出される
目の前に迫る黄色い光
私はバリアを張ろうとするけど間に合わない

私を中心に黄色い爆発が巻き起こる
爆発の瞬間誰かが私の目の前に居たような気がした…

Ｓｅｎｄｏｕｔ．．．

第11話、「ファーストエンカウント」（後書き）

フェイト登場です！

晃「やっとか…」

うん、今回はかなり難産だった

晃「え？いつものことじゃん」

いや、まあ、そうなんだけど

この後、本格的に原作をブレイクしていくからそれを考えるとつい

つい考え込んでしまって…

で、なのはちゃんには悪いけど今回はほとんど咬ませ犬みたいにな

っちゃいます

晃「…いま全てのなのはファンを敵に回したな」

いやあああああ！

ちゃんと後で救済処置があるから許してえええ！

あ、痛い！石を投げないで！痛！

てなわけで次回は戦闘です！って痛い！

晃「次回もよろしく！」

第１２話、「ネタが思いつかない時ってどうしてる？」（前書き）

サブタイ意味不だが気にするな！

第１２話、「ネタが思いつかない時ってどうしてる？」

Ｓｅｎｄ？

ジュエルシードの反応があった地点にはとても大きなこの世界の「ネコ」と言う原生生物がいた

でもサイズは通常の比ではなくて、とても大きくなっていた

私の使い魔、アルフも

「たぶん、ジェルシードの影響だろうねぇ～」

って念話を通して言っていた

なら、私がやることは一つ

迅速に、かつ確実に封印するだけ

だから私はまず牽制に威力を抑えたフォトンランサーで攻撃してみる

「バルデッシュ、フォトンランサー連撃」

『Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ　Ｆｕｌｌ　ａｕｔｏ　ｆｉｒｅ』
バルディッシュも私の意思をくみ取って最適の魔法設定にしてくれる
でもネコは特に避けることもなく反撃をする気配もない
ならすぐに封印してしまおうと思っているとそこで邪魔が入った
『Ｗｉｄｅ　ａｒｅａ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』
白いバリアジャケットを着た子がネコに放った魔力弾を防いでいた
「魔導師？」
その白い魔導師はネコの背中に乗って障壁を展開している
私はネコの足元にフォトンランサーを放ってネコを転ばせる
結界が張られていたから魔導師が居るだろうと思っていたからさほど驚かなかった
私は白い魔導師の近くに立っていた木の枝に移動する
「同系の魔導師…、ロストロギアの探索者か…」
私と同じミッド式の魔導師、白いバリアジャケットに栗毛の女の子
「…バルディッシュと同系のインテリジェントデバイス…」

金色の三日月型に赤い宝石、形状は違うけどたぶんバルディッシュと同系列

「バルディッシュ…？」

白い魔導師はこちらを見て困惑しながら見つめる

何となくだけどこの子とは協力出来そうにない

「ロストロギア、ジュエルシード…」

だったら先手必勝

『Ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ　Ｓｅｔｕｐ』

バルディッシュもサイズフォームになって答えてくれる

「申し訳ないけど…いただいて行きます…」

そう言って白い魔導師の子に切りかかった

『Ｅｖａｓｉｏｎ　Ｆｌｉｅｒ　ｆｉｎ』

でも行動不能にするために足に切りかかったら飛行魔法で空に逃げられた

でもまだ手はある

『Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ』

サイズフォームで作った魔力刀を白い魔導師の子に放つ
でもたぶん防がれる
だから私は空に上がって爆煙の中から出てくるのを待つ
案の定、煙の中から出てきた白い魔導師の子に切りかかる
デバイスで防がれるけど、対した力じゃない
「なんで…」
そんな時、白い魔導師の子が喋りかける
「なんで、急に…こんなッ！」
そう言ってきたとき何となくわかった
この子は優しいんだ
でも…
「答えても…、たぶん、意味は無い…」
そう言ってこっそり体を魔力で強化する
そしてそのままバルディッシュを引き抜く
「きゃぁぁあああああ！」

白い魔導師の子はそのまま地面に激突する、でもまだ意識があるみたいで起き上がろうともがいている

そんな子にとどめを刺すのは気が引けた、だけど…

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　ｌａｎｃｅｒ　Ｇｅｔ　ｓｅｔ』

邪魔をされたら私の大切な人が悲しむ

だから

「…ごめんね」

『ｆｉｒｅ！』

私は白い魔導師の子にフォトンランサーを放つ

瞬間、白い魔導師の子を中心に黄色い光がドーム型に広がる

これでたぶん邪魔はされない

そう思って私はネコの方に視線を向けた瞬間

「ずいぶんと、物騒なことをしているな」

聞いたことの無い声が白い魔導師のこの方から聞こえてきた

Ｓｅｎｄｏｕｔ

Ｓｅｎｄ晃

俺の目の前には金髪ツインテールで黒いバリアジャケットに黒いデバイスを持った少女が中に浮いていた

後ろにはぼろぼろになったなのは、意識はあるようだが立つのもままならないと言った感じだ

（予想外だった、なのは意外にもジュエルシードを狙っている奴がいるとは…）

知らせを受けたのは数分前…

（何！？本当か？カノ！）

カノが発動した結界に侵入した者がいると俺に知らせてきた

誰が侵入したかは分からないが少なくとも魔導師である可能性が高いらしい

（「加奈ちゃん」か？他の転生者の可能性は？）

（Ｎｏ，ｔｈｅｒｅ ｉｓ ｎｏ ｐｏｓｓｉｂｉｌｉｔｙ（可能性はありません））

だとすれば第３の転生者か？

もしくはこの世界の魔導師だろうか…

だが思考の海に浸っているとカノが結界の中で戦闘が始まったと告げた

（何だと！？）

（ど、どうしたのあき兄ぃ？）

恐らく多少なりと表情に出ていたのだろう

夏と春がこちらを心配そうに見つめている

（…結界内部で戦闘が始まった）

（ジュエルシード…ですか？）

春が念話で聞く

（いや、他の魔導師のようだ）

（（！？））

二人の顔が驚愕に変わる

「どうしたのよ三人とも、顔色が悪いわよ？」

アリサが俺達の様子を見て心配してくる

「いや、何でもないよ」

「そう？ならいいんだけど」

一応ごまかすが、信じている様子はなさそうだ

（とりあえず、俺が結界の中に行く、二人はココに居てくれ）

（ッ！晃お兄ちゃん一人で！？）

（あぁ、二人はココですずか達を守ってくれ、相手が何者か分からない以上、すずか達に危険が無いとは言い切れない）

（でも…）

（分かりました）

（春ちゃん！？）

夏は春に視線を向ける

（私は晃お兄ちゃんを信じる、なっちゃんは？）

（…私も、信じる！）

（ありがとう）

俺は信じると言ってくれた二人に感謝する

「ねぇ、3人ともホントに大丈夫なの？さっきからずっと黙ってるけど…」

「うん、何処か気分が悪いなら部屋に戻った方がいいかな？」

アリサとすずかが心配する

「いや、そろそろ高町が心配になってきてな、俺ちょっと探してくるよ」

そう言って俺は椅子から立ち上がる

「じゃあ、あたし達も行こうか？」

「いいよ、どうせ近くに居るだろうし」

ウソは言ってない

そう言いつつ俺は林の茂みに向かって走り出す

しばらく林の中を進むと結界の中に入る

結界はすずかの家を覆うように張られていたが、流石にすずか達の目の前で結界に入れば「その場から消えた」様に見えるため出来なかった

結界の中に入った途端、すごく濃度の高い魔力の気配がする

俺はいやな予感がして急いで戦闘区域まで向かう

戦闘区域に到着しなのはともう一人の魔導師を目視で確認した

すでになのはは地面の小さなクレーターの中心に居て、もう一方が空中で魔力弾を放とうとしていた

（ッ！障壁は…間に合わないかッ！）

俺は空中でデバイスを振り下ろす魔導師の射線上に割り込む

そして

『魔力を変換する』

一瞬、俺となのはの周りを黄色い魔力光が埋め尽くす
しかし、俺にもなのはにもその黄色い魔力が届くことは無い
そして黄色い魔力が晴れた時、俺は空中にたたずむ黒いバリアジャケットを着た魔導師に声をかける
「ずいぶんと、物騒なことをしているな」
「！？」
空中に居る魔導師はこちらを見て驚いている、どうやら俺に気が付いていなかったようだ
「ヤマーダ…さん？」
なのはは倒れたままこちらに視線を向けている
「話は後だ、立てるか？」
そう言ってなのはに手を貸す
黒い魔導師も手を出してこない
俺はなのはにてを貸した後、黒い魔導師に向き直る
「…直撃したはず、障壁の反応も無かった」
黒い魔導師が呟くように言う

「答える義理はないな」

そう言うと黒い魔導師はデバイスを鎌の用に変形させて構える

「知らなくていい…、邪魔するなら倒すだけ」

そい言って魔力の刃を俺に向かって振り下ろす

「…！？」

しかしその魔力の刃は俺を傷つけることはできない、それどころか魔力の刃自体が消えてなくなる

「そんな…どうして…」

「すまんな、そう言う体質（スキル）なんだ」

そう言って俺は黒い魔導師の腹部に突きを放つ

「くはッ！？」

それをもろに受けた黒い魔導師は背後にあった木に激突する

「馬鹿な…、バリアジャケットを一部解除するなんて…」

驚いたユーノが呟くように声を発する

事実黒い魔導師の腹部はバリアジャケットが消えて肌が露出している

「ちゃんともらった分は返さないとな」

俺は手を黒い魔導師に向けて黄色い魔力を放つ

『Ｄｅｆｅｎｓｅｒ』

しかし障壁で防がれる

そして黄色い魔力砲が天空に伸びる

「…範囲攻撃か？」

そう言って構えるが空から降ってくる黄色い魔力の槍は俺やなのは、ユーノに当たらず

巨大なネコの上に降り注ぎ最後に太い柱がネコを覆うように貫く

そしてそこには手のひら大の蒼い宝石

「ジェルシードが狙いか！」

だがそう気付いた時には遅く黒い魔導師がジュエルシードを持ってすごい速さで飛んでいく姿しか見えなかった

「逃げられたか…」

カノに頼んで探知してもらおうと試みたがすでに探知圏内に居なくなったそうだ

「ヤマーダさん！さっきのはいったい…」

ユーノが結界を解きながら俺に聞いてくる

「…魔力の変換、および任意の操作と言えば分かるか？」

「…？」

ユーノもなのはも分からないようだ

「相手の魔力を自分の思いどおり操る…」

「ッ！？そんな馬鹿げたことができるはずが…」

まぁ、ユーノの言うこともっともだ

自分の最大の魔法も操られてしまえばただの魔力の塊も同然

しかもバリアジャケットも魔力の糸で編みこまれた防護服なのだから操られて消されればその部分だけ無防備になるのだからな

そもそも魔力とは空気中の魔力の素を自分のリンカーコアで自分の魔力として生成してはじめて魔力として使用できるのだ

しかしそのリンカーコアでの魔力の生成方法は個人でまったく違い同じ魔法はあっても同じ魔力は存在しないのだ

故に自分以外の魔力を操ることなど出来なかったのだ

「まぁそれが俺のレアスキルだよ」

他にも色々と制限や欠点があるのだが、まぁ今は言わなくていいだろう

「それでは、私は失礼する」

そう言って転移しようとする

「待ってください！ヤマーダさん！」

なのはに呼び止められる

「ん？なんだ？」

「約束…」

…あ

そう言えば次にあったら訓練するって約束したんだっけ…

「…おぼえている、しかし君が戻らなければこの家の者が心配するぞ？」

「でも…」

そう言えばもうすぐゴールデンウィークだったな…

「ならば五月四日、五日の二日間、海鳴臨海公園にて待つ、」

そう言うと今度こそ転移魔法を発動する

と言ってもさほど遠いところに転移はしない

同じ林の中に転移してバリアジャケットを解除しなのはの名前を呼びながらさっきまでいた場所まで進む

「高町～、おーい高町～！」

こうすれば声に気が付いて早めにデバイスを待機モードに戻せるだろう

そんなことを思いつつ俺はなのはと合流するため林を進んでいく

…あ、なのはの怪我はなんて言い訳しようか考えてないや

ま、いいか

第12話、「ネタが思いつかない時ってどうしてる？」（後書き）

と言うわけで主人公の『能力』登場です！

晃「なんて言うか…、反則だな」

取り合えず詳しいデータをココに書いておこう

能力名：魔力操作（ジャックマジック）

主な効果

自分以外の魔法および魔力を意のままに操ることができる能力

欠点

使用者がふれていなければ発動不可
能力モード発動中、自身の魔力の使用不可（同じく魔法も）
認識できていない魔法および魔力には発動不可
空気中の魔力素に対して能力の発動不可

とまぁ、こんなもんです

晃「つまり能力を発動している間、魔法が使えないということか」

そゆことだね、相手の魔力を使っての発動は出来るけど、これはかなり効率が悪いからな―…

他には相手の変換資質も同じように操れるくらいかな？

晃「なんて言うか…まじチートだな…」

まぁ一応オリ主のチート物だしね

でもかなり欠点や制限設けて軽減したつもりだけど

晃「でも事実上、高町の桜色の核爆弾（スターライトブレイカー）も防げるんだろ？」

まぁね、対ヴィヴィオ戦の時の（ビット&デバイスの計五方向からの）も防げるね

…そう考えたらやっぱチートだった

晃「下手したら魔法での攻撃に対しては最強じゃん」

だから守り最強（作者調べ）の一〇通行さんに似てるって言ったんだよ

晃「いや、どっちかって言ったら『不幸な無能力の少年』の方じゃないか？」

…あ

晃（今さら気付いたのか…）

それはともかく

次回は温泉ですよ！
忍さんの〇〇〇が…、うひょひょひょｗｗ
晃「なんかいやな予感しかしないんだが」
気のせい気のせい
では次話もよろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8803w/

え？転生？あ～はいはいそこのコンビニで売ってるあれね

2011年10月12日14時10分発行